

# 北巨摩市町村文化財担当者会

平成10年度年報

## 研究活動報告

「ミニ・グランドキャニオン」出土品の文化財指定に伴う事前調査について 杉本 充 7

白州町ミニ・グランドキャニオンの自然科学分析 パリノ・サーヴェイ 9

縄文時代草創期の遺跡の立地について 秋山圭子 20

## 発掘調査速報

## 新規指定文化財

1 9 9 9

北巨摩市町村文化財担当者会

# 八ヶ岳考古

(平成10年度年報)

北巨摩市町村文化財担当者会

## 例　　言

- 本書は平成10（1998）年度の北巨摩市町村文化財担当者会の事業をまとめたものである。
- 本書の執筆は、「組織と活動」を事務局が行い、Iの「研究活動報告」は文頭に文責を記し、IIの「発掘調査速報」については各調査担当者が行っている。
- 本書の編集は、竹川眞人（武川村教育委員会）が行った。
- 本会の活動並びに本書の刊行において、山梨県教育委員会学術文化財課・北巨摩教育事務所・北巨摩市町村文化財審議会連絡協議会・郡内市町村役場並びに教育委員会の皆様にご協力を頂いた。記して感謝いたします。

## 目　　次

### 例言・目次

北巨摩郡周辺地形図

組織と活動	1
-------	---

### I 研究活動報告

「ミニ・グランドキャニオン」出土品の文化財指定に伴う事前調査について（杉本 充）	7
白州町ミニ・グランドキャニオンの自然科学分析（パリノ・サーヴェイ）	9
绳文時代草創期の遺跡の立地について（秋山圭子）	20

### II 発掘調査速報

1. 北下条墨址（韮崎市）	13
2. 石之坪遺跡（韮崎市）	47
3. 上横尾遺跡（韮崎市）	50
4. 光熙寺跡（双葉町）	54
5. 深山田遺跡（羽野村）	55
6. 東向長坂遺跡（第2次）（須玉町）	59
7. 伝仁王屋敷遺跡（高根町）	62
8. 丘の公園入口遺跡（高根町）	63
9. 龍角西遺跡（長坂町）	64
10. 紺屋遺跡（長坂町）	66
11. 高松遺跡（長坂町）	67
12. 上前後沢第2遺跡（小淵沢町）	68
13. 上八里田遺跡（小淵沢町）	68
14. 史跡 谷戸城跡（大泉村）	69
15. 上小用遺跡（第4次調査）（白州町）	73
16. 黒澤遺跡（武川村）	75
17. 真原A遺跡（武川村）	77
18. 実原A遺跡（武川村）	78
平成10年度発掘調査一覧	79

### III 新規指定文化財

1. 馬場の口番所（須玉町）	83
2. 深草館跡（長坂町）	84

北巨摩市町村平成10年度刊行の埋蔵文化財発掘調査報告書・覽



北區鹿耳門地形圖 (1:200,000)

(地図中の数字は、発掘調査実績の遺跡番号と一致する)

## 組織と活動

### 組織概要

北巨摩市町村文化財担当者会（以下、北文担と略す）は、平成7年4月より北巨摩郡内9町村と垂崎市の文化財担当者を会員として組織され、文化財保護に関する啓蒙普及活動、文化財保護に関する調査研究、文化財担当者の資質向上を目的とする研修、郡内文化財保護行政の様式を報知するための年報発行を、活動の主眼としている。さらに、山梨県教育庁学術文化財課長・北巨摩教育事務所長、北巨摩文化財審議会委員連絡協議会長を参与に迎え、その活動に指導、助言いただいている。会運営は各自治体の負担金収入を充て、年報発行のための収入と支出の差は、負担金・事務局費・事業費とは別に設けている（文末、会則参照）。

そうした活動は、月1回の定例会により、企画、実施されている。定例会は特に定めはないが、郡内自治体の協力を得て施設を借りし、開催している。

### 平成10年度北文担役員

平成10年度における北文担の役員は次のとおりである。

会長 山下孝司（垂崎市）

副会長 佐藤勝広（小瀬沢町）

参考 文化財課長 小池光夫

北巨摩教育事務所長 中村勝一

北巨摩市町村文化財審議会委員連絡協議会長

事務局員 高須秀樹（灰葉町）

小宮山隆（長坂町）

監事 田宮正樹（高根町）

以上の役員のほか、研究活動・年報編集のため、次のとおり委員が選任された。

年報研究活動委員 佐野 隆（明野村）、竹田眞人（武川村）

### 平成10年度の活動

平成10年度においては、研修会3回と県外研修を実施し、遺跡の見学会を垂崎市石之坪遺跡で主催した。また調査研究活動として、月例会に毎回2ないし3名が中間報告を行い、年報において発表した。

4月22日 定期総会 高根町農村環境改善センター

9年度事業報告・会計報告、10年度事業計画・予算、役員人事について協議。研究活動中間報告（小宮山）。

5月20日 5月定期会 小瀬沢町福祉活動センター

農業関連（区画整備等）の発掘調査基準について協議。研究活動中間報告（佐野・秋山）。

6月17日 6月定期会 双葉町公民館

発掘調査基準について協議。研究活動中間報告（竹田・山下）。

7月15日 7月定期会 長坂町農村環境改善センター

行政監査、体験発掘会・遺跡見学会について協議。研究活動中間報告（雨宮・浅辺）。

- 8月1日 体験発掘会 明野村 桑森遺跡
- 8月19日 8月定例会 大泉村総合会館  
発掘調査基準、遺跡見学会について協議。研究活動中間報告（山下（率））。
- 8月22日 遺跡見学会 蕨崎市 石之坪遺跡
- 9月9日 9月定例会 白州町総合会館  
発掘調査基準について協議。研修会：合田芳正氏『古代の縄』。研究活動中間報告（杉本・高須）。
- 10月23日 10月定例会 明野村埋蔵文化財センター  
岐北土地改良事務所との調整会議の対応について協議。研究活動中間報告（秋山）。
- 10月23日 岐北土地改良事務所との調整会議 岐北土地改良事務所
- 11月18日 11月定例会 蕨崎市市民会館  
岐北土地改良事務所との調整会議の結果について協議。研究活動中間報告（岡間・伊藤・佐藤）。
- 12月16日 12月定例会 双葉町公民会館  
遺跡見学会について協議。研究活動中間報告（小宮山・佐野）。
- 1月20日 1月定例会 武川村教育福祉センター  
県外研修について協議。研究活動中間報告（村松・竹田）。
- 2月17日 2月定例会 須玉町コミュニティーセンター  
県外研修について協議。研究活動中間報告（雨宮・山路）。
- 2月18日 県外研修 足助城址他（愛知県東加茂郡足助町）
- 2月19日 市町村埋蔵文化財専門職員研修会 風土記の丘研修センター
- 3月17日 3月定例会 長坂町農村改善センター  
年報の内容の検討、10年度事業・会計中間報告、11年度事業計画・予算、役員人事について協議。

#### 平成10年度研究活動中間報告リスト

- 4月22日 小宮山隆 『長坂町別当西遺跡出土の堀之内式土器について』
- 5月20日 佐野 隆 『縄文時代の石器』—祭祀の道具 その1 石棒・石柱—  
秋山圭子 『縄文時代草創期の遺跡・立地について(1)』
- 6月17日 竹田眞人 『縄文時代中期後業における墓制について①』  
山下大輔 『山梨県内の斜行沈線文を多用する土器』
- 7月15日 雨宮正樹 『縄文時代後期における祭祀遺跡について一考察』  
～特に七里岩台地上として～  
渡辺泰彦 『北巨摩型土器について』
- 8月19日 山下孝司 『北巨摩の8世紀の土器』
- 9月9日 杉本 充 『ミニ・グランドキャニオン！出土品の町指定文化財に伴う事前調査について』  
高須秀樹 『益無川の治水について』
- 10月23日 秋山圭子 『縄文時代草創期の遺跡・立地について(2)』
- 11月18日 岡間俊明 『住居廃絶後の住居跡内の「道具の持ち込み」について』  
伊藤公明 『曾利式期の地床が状焼土跡について』—八ヶ岳南麓を中心として—  
佐藤勝広 『道祖神について』

- 12月16日 小宮山隆 『小和田遺跡D地区の竪穴遺構について』  
佐野 隆 『深山田遺跡について』
- 1月20日 村松佳幸 『北巨摩の石鍤について①』  
竹田眞人 『縄文時代中期後葉における墓制について②』
- 2月19日 雨宮正樹 『“椎”について』  
山路恭之助 『N P Oについて』



石之坪遺跡現地説明会



桑森遺跡体験発掘



県外研修（足助城址）

平成10年度北巨摩郡市町村文化財担当者会会計決算報告

収入の部

項目	予算額	決算額	比較増減	備考
前年度繰越金	13,275	13,275	0	
市町村負担金	100,000	100,000	0	10市町村×10,000円
年報印刷負担金	500,000	500,000	0	10市町村×50,000円
雑 収 入	100	211	111	貯金利息
合 計	613,375	613,486	111	

単位：円

支出の部

項目	予算額	決算額	比較増減	備考
事務局費	32,320	16,520	△15,800	
通信費	12,320	12,320	0	切手代
事業費	20,000	4,200	△15,800	ラベルシート
事業費	70,000	96,966	26,966	
見学会費	30,000	30,425	425	案内板2枚
講師謝礼	30,000	20,000	△10,000	合田正芳先生(9月9日)
研修会費	10,000	46,541	36,541	県外研修(愛知県足助町)
年報印刷製本費	500,000	500,000	0	
予備費	11,055	0	△11,055	
合 計	613,375	613,486	111	

収入決算額613,486円 - 支出決算額613,486円 = 0円

北巨摩市町村文化財担当者会会則

- 第1条 本会は、北巨摩市町村文化財担当者会と称し、事務局を会長の定めるところにおく。
- 第2条 本会は、各市町村における文化財保護、研究、活用の推進のために、必要な研修を行うことと同時に文化財担当者相互の親睦を図り、北巨摩地区文化財行政の進展に資することもって目的とする。
- 第3条 本会は、前条の目的を達成するために、次の事業を行う。
- (1)文化財調査結果を地域社会に恩恵するための各種行事の企画・運営。
  - (2)各市町村の文化財を素材とした月例の研究会の開催。
  - (3)先進地との交流および視察。
  - (4)各市町村単位に行う事業の相互援助。
  - (5)関係機関との文化財行政についての研究協議。
  - (6)関係機関との文化財調査についての研究協議。
- 第4条 本会は、各市町村教育委員会に勤務する文化財担当者および調査員をもって組織する。
- 第5条 本会に次の役員をおくる。
- 会長1名、副会長1名、事務局員2名、監事2名、参与3名
- 第6条 役員の選出は次のようにする。
- (1)会長・副会長は、会員のなかから会員の互選とする。
  - (2)事務局員は会長が委嘱する。
  - (3)監事は役員以外の会員のなかから1名、北巨摩教育事務所から1名を選出する。
  - (4)参与は、山梨県教育厅文化財課長、北巨摩教育事務所長および北巨摩文化財審議会委員連絡協議会長をもって構成する。
- 第7条 役員の任期は1年とする。ただし、事務局員は2年とする。役員の選任にあたってはこれを妨げない。
- 第8条 会長は、会員を統括するとともに外部に対して会員を代表する。
- 第9条 本会の経費は、各市町村負担金およびその他の収入をもってあてる。各年度の市町村負担金は事業計画に準じて前年度に会員協議のうえ取り決める。
- 第10条 会計は、毎年4月1日に始まり、翌年3月31日に終まる。
- 第11条 会計の処理については、年度末および必要に応じて会員に報告する。

付則

この会則は、平成7年4月1日から実施する。

# I 研究活動報告



# 「ミニ・グランドキャニオン」出土品の文化財指定に伴う事前調査について

杉本 充

## 1.はじめに

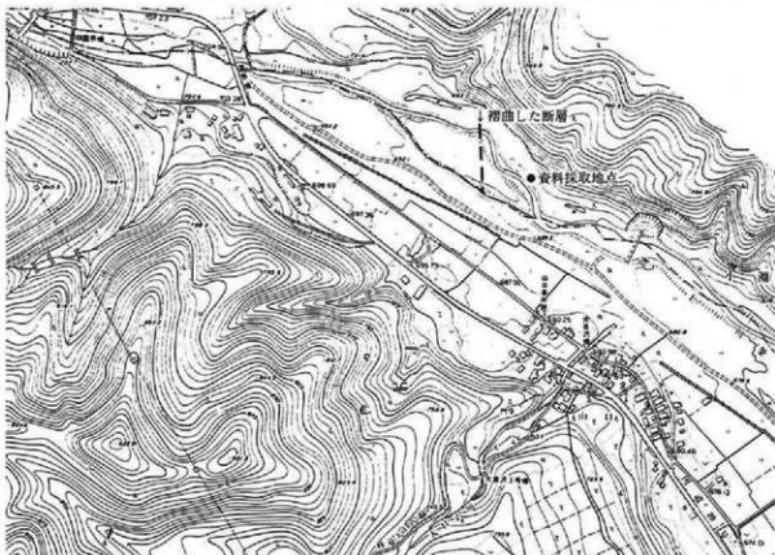
山梨県北巨摩郡白州町上教来石に所在する「ミニ・グランドキャニオン」は、1982年7月31日から8月1日にかけて通過した台風10号などの豪雨から増水した釜無川の川床が異常に洗掘され出現した。その後の観光フィーバーの中での小学生の転落事故があり学術調査もされないまま埋め戻された。しかし、川床は浸食されつづけており現在でも糸魚川静岡構造線や「木の化石」などが観察できる。

今回の調査は、県教育委員会から「ミニ・グランドキャニオン」出土の樹根化石と釜無川の左岸から右岸へ南北に走る褶曲した断層を県指定文化財としたいとの内示があり、町文化財審議会において検討しロ野道男山梨県地学会長・田中取大月短期大学教授の協力を得て1995年8月に町教育委員会により実施した。

調査は、トータルステーションを用いた開放トラバースによる測量と教来石礫層に相当すると思われる露頭から資料採取を行った。

## 2.測量調査

測量は、釜無川左岸（小淵沢町）国堀橋下流約500mの地点に露出する褶曲した断層と「木の化石」などが観く露頭の位置を確認するため行った。町にある地図では河川部分は空白になっているため、1985年に町で発行した1万分の1地形図（1981年撮影）を参考に用いた。当初は地図と現状でかなり変化があるものと



釜無川国界橋下流域 (1/10000)



資料採取地点（写真中のスケールは3m）

予想されたが、測量の結果には現状と相違がないことが確認された。

白州町発行の1万分の1地形図では「ミニ・グランドキャニオン」と呼ばれる釜無川国境橋下流域の左岸の小淵沢町と右岸の白州町の境界は現在の水流ではなくやや南側に在る古い川床を基準にしている。複数した断層は古い川床までしか確認出来ず、白州町側には露出していないことが判った。

### 3. 資料採取

「ミニ・グランドキャニオン」は異常洗掘により創り出された断崖等のほかに、直径30~80cmの樹木や樹根の「化石」が大量出現したことにも注目を集めた。今回の調査ではこの「木の化石」を含む4層の泥炭層からタガネとハンマーを用い資料を採取し、花粉分析及び樹種の同定をパリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。

分析結果は、後ろの報告書の通りである。資料の採取地点は、釜無川左岸国境橋下流約600mで第VII系公共座標X-16.133km・Y-18.634km、標高674~679.5mにあたる。

### 4. おわりに

この調査後に白州町郷土資料館に保管されてきた樹根化石は、1996年6月に「トウヒ属の樹根化石」として町指定天然記念物に指定され現在尾白の森名水公園内に展示されている。また1997年12月に小淵沢町郷土資料館保管のものと共に山梨県指定天然記念物に指定された。

# 白州町ミニ・グランドキャニオンの自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

## はじめに

釜無川は、国界橋から下流にかけて、「ミニ・グランドキャニオン」とよばれる峡谷になっている。この峡谷の基盤を作っているのは、新第三系の火成岩や深成岩類である。これらの地層は、糸魚川-静岡構造線の一部をなす断層群によって切られており、一部に破碎帶がみられる。その上には、第四系の地層が堆積し、いくつかの地形面を作っている。の中でも、白州町上教来石付近には、黒褐色の泥炭層が露出し、所々に立木や流木がみられる。今回は、これらの各層が堆積した当時の古環境を知る目的で、珪藻分析、花粉分析、ならびに樹種同定をそれぞれ行う。

## 1. 試料採取地点の地質

今回分析を行う地点は国界橋よりも約500m下流の釜無川左岸の崖頭である。この崖頭は高さ約10mで、砂礫層中に木材の包含層が4層準在する。そこで、各包含層を上位よりI～IV層と命名した。この巖層は、層位関係から教来石砂疊層（信州研究グループ、1969）に相当すると考えられる。本層は、花崗岩を主とする層理の発達が悪い砂礫層で、泥炭質砂層、泥炭層を伴い、泥炭層中からは、多くの植物化石が産出する（信州研究グループ、1969）。本層は、上部南佐久郡群Ⅰ・Ⅱの間の不整合期に形成されたと考えられており、中部更新統に対比されている（八ヶ岳固体研究グループ、1988）。年代値は、本層の下位にあたる南佐久層群中部黒層Ⅲ中の火山灰層（O. I.）のフィッシュントラック年代値として、25万～27万年前後の値が得られている（八ヶ岳固体研究グループ、1988）。

## 2. 試 料

木材包含層I～IVより各1点ずつ計4点の試料を採取し、珪藻分析・花粉分析用試料とした。また、木材については、今回I～IV層から採取された試料のほか、過去に教来石砂疊層から出土した木材を加え、計9点を同定する。樹種同定用試料の詳細については、樹種同定結果表に併せて記す。

## 3. 方 法

### (I) 硅藻分析

試料を湿重で約5g秤量し、過酸化水素水、塩酸の順に化学処理し、試料の泥化と有機物の分解・漂泊を行なう。自然沈降法で粘土分、傾斜法で砂分を除去した後、適量計り取りカバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、ブリュウラックスで封入する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1000倍で行い、メカニカルステージで任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に、200個体以上同定・計数する（珪藻化石の少ない試料はこの限りではない）。種の同定は、K.Krammer and Lange-Bertalot (1986-1988・1991a・1991b)、K.Krammer (1992)などを用いる。同定結果は、産出種をアルファベット順に並べた一覧表で示す。堆積環境の解析にあたり、塩分濃度に対する適応性から産出種を海水生種、海水～汽水生種、淡水生種に分類し、淡水生種については更に塩分・水素イオン濃度（P II）・流水に対する適応性に基づいて生態区分する。そして、主要な分析群について、主要珪藻化石の層位分布図を作成する。図中の海水

～淡水生種の比率と各種産出率は全体基数、淡水生態の生態性の比率は淡水生種の合計を基数とした相対頻度で産出する。堆積環境の分析に当たっては、安藤（1990）、伊藤・堀内（1991）の環境指標種などを参考とする。

### (2) 花粉分析

試料約5gについて、水酸化カリウムによる泥化、鈴剤、重液（臭化亜鉛：比重2.2）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトトリス処理の順に物理・化学的処理を施し、花粉化石を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製し、光学顕微鏡下でプレパラート全面を操作し、出現する全ての種類について同定・計数する。

結果は、木本花粉は木本花粉総数、花本花粉・シダ類胞子は総花粉・胞子数から不明花粉を除いたものを基数とした百分率で出現率を算出し図示する。図表中で複数の種類をハイフンで結んだものは、種類間の区別が困難なものである。

### (3) 樹種同定

剃刀の刃を用いて、試料の木口（横断面）、征口（放射断面）、板目（接線断面）の3断面の徒手切片を作製する。切片は、ガム・クロラール（抱水クロラール・アラビアゴム粉末・グリセリン・蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートする。プレパラートは、生物顕微鏡で透過光による木材組織の観察を行い、その特徴から種類を同定する。

## 4. 結 果

### (1) 珪藻化石

結果を表1、図1に示す。珪藻化石は、I層から少ないながらも産出するが、それ以外の地層は無化石である。I層の完形殻の出現率は約70%と高い。産出種は全て淡水生種から構成され、産出分類群数は5属7種類と少ない。淡水生種の生態性（塩分、水素イオン濃度、流水に対する適応度合い）の特徴は、貧塩不定性で好アルカリ性種の*Rhopalodia nobae-zealandiae*が約70%と優占することである。これに次いで、好アルカリ性種で好止水生性の*Cymbella cistula*が約20%産出する。

### (2) 花粉化石

結果を表2、図2に示す。花粉化石は、いずれの試料からも産出するが、保存状態はよくない。草本花粉はほとんどみられず、木本花粉が産出する。下位では、モミ属、ツガ属、トウヒ属、マツ属などの針葉樹が多産するが、上位へいくにつれてこれらは少なくなり、ハンノキ属、ブナ属、コナラ属が増加する。

### (3) 樹種同定

同定結果を表3に示す。III層とIV層から出土した木材化石の中には、保存状態が悪く切片を作製することができなかつた試料が各1点ある。その他の試料は全て針葉樹で、3種類（トウヒ属・モミ属・ヒノキ科）が同定された。解剖学的特徴などを以下に記す。

・トウヒ属 (*Picea sp.*) マツ科

早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部は広い。垂直樹脂道および水平樹脂道が認められる。放射組織は仮造管と柔細胞、エビセリウム細胞よりなり、柔細胞壁は滑らかで、

表3 樹種同定結果

試料名	樹種
I層	針葉樹
II層	モミ属
III層	モミ属
	不明
IV層	モミ属
	不明
白州町役場展示埋没樹	トウヒ属
白州町郷土資料館所蔵品	トウヒ属
小瀬沢町郷土資料館所蔵樹根化石	トウヒ属

表 1 結構分析結果

種 類	種 分	生 態 性				環 境 指 標 種	I層	II層	III層	IV層
		pH	分	pH	水					
<i>Cymbella cistula</i> (Fehr.) Kirchner	Ogh-ind	al-il	1-ph	O,T	20	-	-	-	-	-
<i>Gomphonema parvulum</i> Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	U	3	-	-	-	-	-
<i>Gomphonema</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk	U	1	-	-	-	-	-
<i>Navicula cari</i> Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	r-bi	RA,U	1	-	-	-	-	-
<i>Nitzschia denticula</i> (Kuetz.) Grunow	Ogh-ind	al-bi	ind	U	1	-	-	-	-	-
<i>Nitzschia linearis</i> W. Smith	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	3	-	-	-	-	-
<i>Rhopalodia gibberula</i> (Ehr.) O. Muller	Ogh-il	al-il	ind	U	2	-	-	-	-	-
<i>Rhopalodia novae-zealandiae</i> Hustedt	Ogh-ind	al-il	ind	U	71	-	-	-	-	-
海水+淡水合計					0	0	0	0	0	0
海水+汽水+生梗合計					0	0	0	0	0	0
汽水+生梗合計					0	0	0	0	0	0
淡水+生梗合計					102	0	0	0	0	0
珊瑚化石總數										

## 凡例

pH：水素イオン濃度に対する適応性

al-bi：アルカリ性種

al-il：好アルカリ性種

ind：pH不定性種

r-ph：好流水性種

r-bi：好流水性種

unk：pH不明種

C.R.：流水に対する適応性

I-ph：好淡水性種

ind：流水不定性種

r-ph：好流水性種

unk：流水不定性種

## 環境指標種

O：沼沢湿地付着生種 (安藤, 1990)

U：広適性種 T：好流水性種 (以上は Asai, K. &amp; Watanabe, T. 1991)

RI：附生種藻 (RA: A群, 伊藤・堀内, 1991)

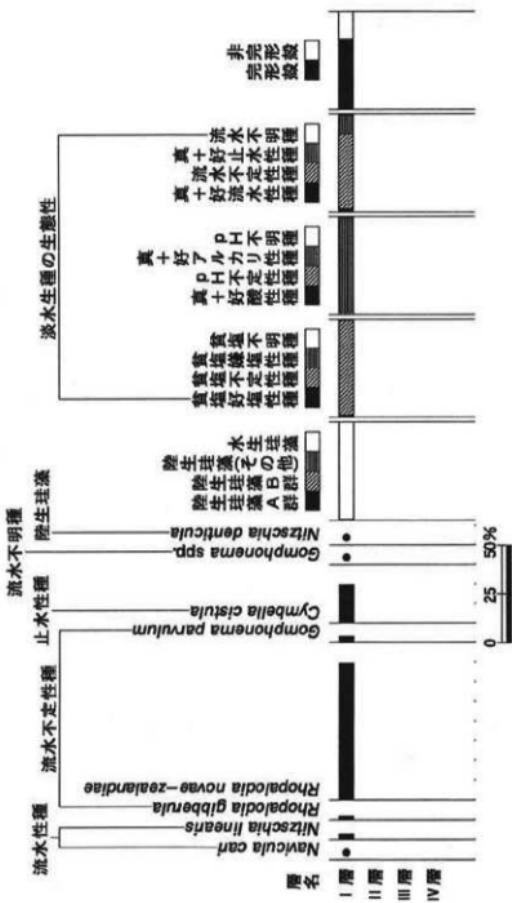


図1  
珪藻化石組成  
各種産出率=完形殻産出率は全種基数、淡水生性の生態学的比率は淡水生性の合計を基数として相対頻度で表した。いすれも化石殻数が100個体以上検出された資料について示す。  
なお、●は産出率1%未満の種類を示す。

じゅず状木端壁が認められる。分野壁孔はトウヒ型で3科~6個。放射組織は單列、1~20細胞高。

・モミ属 (*Abies sp.*) マツ科

早材部から晩材部への移行は比較的緩やか。放射組織は柔細胞のみで構成され。放射柔細胞の壁は粗く、じゅず状木端壁が認められる。分野壁孔はスギ型で1~4個。放射組織は単列、1~20細胞高。

・針葉樹

早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。晩材部に限って樹脂細胞が認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔は保存が良好でないために観察できない。放射組織は単列、1~15細胞高。

以上の特徴から、スギ科の可能性があるが、特定には至らなかった。

## 5. 考 察

珪藻化石が産出したI層は、*Rhopalodia nobae-zealandiae*が優占することを特徴とする。本種は、pH 7.0以上のアルカリ性水域に最もよく生育し、川のような流水にも池のような止水にも生育する種である。また比較的多くみられる*Cymbella cistula*は、どちらかといえば止水域に一般的な種で水の流動の少ない池などに良く見られる種である。これらの珪藻化石が生育するような環境は、比較的穏やかな流水~止水のような環境であると推定される。一方、I層の層相は砂礫層であり、大型の木材遺体を含むことから、堆積時の流速は速かったものと推定される。このようなことから、これらの堆積物は二次的にもたらされた可能性が高く、周辺の環境を反映していると考えられる。一方、これよりも下部のII層~IV層では無化石であった。この原因としては、堆積速度が速く、珪藻化石が取り込まれにくかったことなどが考えられるが、はっきりしない。

花粉分析結果をみると、下位から上位にかけて、針葉樹が多い組成から広葉樹が混じる組成へと変化する。針葉樹が減少し、ハンノキやブナ属・コナラ等属などが増えた傾向は、氷期の寒冷期から温暖期への移行期に、しばしばみられる変化である。大阪湾のボーリングでは、更新世の試料が連続して採取されているが、このような変化が何度か繰り返されている(Furutani, 1989)。これより、中期更新世の間に寒暖が繰り返されていたことが示唆され、本結果もそのうち一つに当てはまると考えられる。

なお、これまで行われた教来石砂礫層から検出された植物遺体として、トウヒ属、ホウノキ、ブナなどが報告されている(信州研究グループ, 1969)。また、チョウセンゴヨウの種子や、モミ属の立木も報告されている(八ヶ岳固体研究グループ, 1988)。今回I~IV層で検出された材はモミ属であり、過去に出土した木材の同定結果についてはトウヒ属である。これらは、いずれもこれまでに報告されている種類である。

教来石砂礫層の植物化石は、多きく2つに分けることができる。一つはトウヒ属の材や球果が多産する層であり、もう一つはモミ属の材が多産し、広葉樹花粉を伴う層である。本層に関する植物遺体群集の変遷については、詳細な地質図の作成と、多くの大型植物化石・微化石を対象とした植物化石同定を行う必要がある。現時点で、今回行ったI~IV層の環境変遷や、化石出土地点の標高などから推測すると、トウヒ属やチョウセンゴヨウなどの針葉樹が主な森林から、針葉樹と広葉樹が混交する植生へと変化していることが伺われる。

教来石砂礫層は、上部南佐久層群のIとIIの不整合期に対比されている。上部南佐久層には、川上湖成層や日野春砂礫層などがあり、多くの植物遺体が産出する(伊藤ほか, 1988)。これらを総括した結果によれば、上部南佐久層群の時期は、冷温帶上部には相当する比較的冷涼な気候であったと推定されているが、教来石砂礫層の堆積する不整合期は、標高の低いところから針葉樹の植物遺体が多産することから、特に寒

表2 花粉分析結果

種類	試料番号	I	II	III	IV
<b>木本花粉</b>					
モミ属	6	21	34	9	
ツガ属	9	14	24	44	
カラマツ属	—	1	7	4	
トウヒ属	5	56	123	70	
マツ属	2	31	17	24	
スギ属	—	4	—	—	
イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科		4			
ヒノキ科	1	—	—	—	
サワグルミ属	3	2	—	1	
クルミ属	6	3	—		
ハシバミ属	—	1	—	—	
カバノキ属	7	5	3	2	
ハンノキ属	48	59	7	1	
ブナ属	21	6	1	—	
コナラ属コナラ生属	21	—	1	—	
ニレ属 ケヤキ属	3	3	—		
キハダ属	1	—	—	—	
シナノキ属	4	3	—	3	
ツツジ科	—	1	—	—	
トネリコ属	1	—	—	—	
<b>草本花粉</b>					
イネ科	3	2	—	—	
ヨモギ属	—	2	2	1	
キク亞科	—	—	—	1	
<b>不明花粉</b>					
他のシダ類胞子	21	99	26	29	
<b>合計</b>					
木本花粉	138	214	217	158	
草本花粉	3	4	2	2	
不明花粉	0	1	2	0	
シダ類胞子	21	99	26	29	
総計(不明を除く)	162	317	245	189	

木本花粉

草本花粉・シダ類孢子

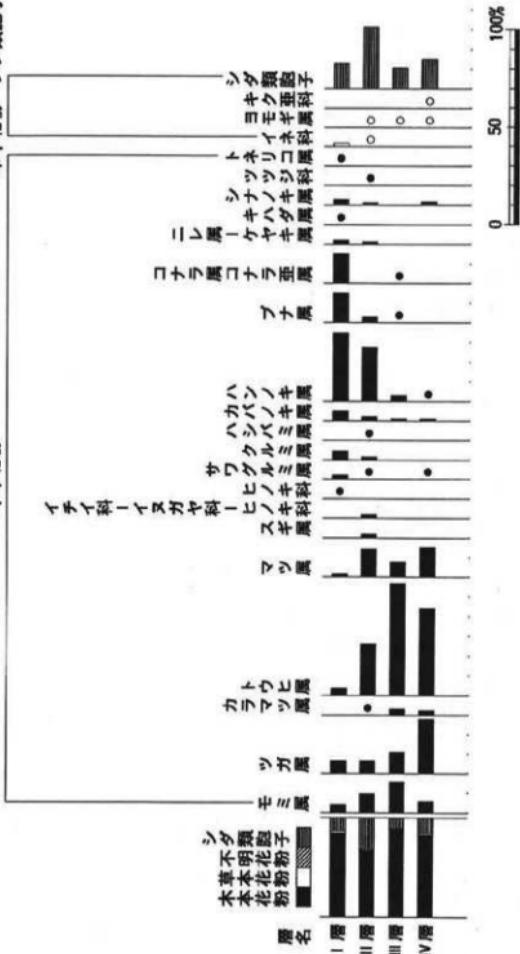


圖2 花粉化石組成

出現半は、木本花粉・シダ類孢子は他のより不明花粉を除く数を基準として百分率で算出した。なお、●○は1%未満の試料について検出した種類を示す。

冷な気候が推定されている（伊藤ほか、1988）。

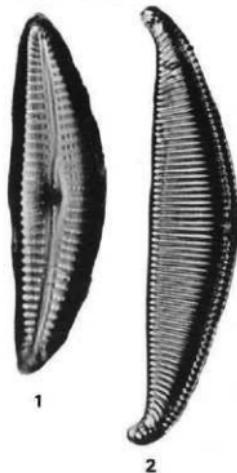
このように、教来石砂礫層は、氷期の寒冷期前後の植生を反映していることになる。この寒冷期については、テフラなどの層位学的な検討結果により、大坂平野に分布する海成粘土層のMa10とMa11との間にあたる寒冷期に相当すると考えられている（熊井、1994）。

今回、教来石砂礫層から検出された樹木や微化石によって、当時の環境推定を試みた。しかし、詳細な検討を行うには、まず本地域の詳細な地質図の作成を行い、それに基づいた各種植物化石の分析・同定を行っていくことが必要であろう。

#### 〈引用文献〉

- Asai,K.&Watanabe,T. (1995) Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophilous and saproxenous taxa.Diatom,10, 35-47.
- 安藤一男 (1990) 淡水席珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用. 東北地理, 42, P. 73-88.
- Furutani Masakazu (1989) Stratigraphical Subdivision and Pollen Zonation of the Middle and Upper Pleistocene in the Coastal Area of Osaka Bay, Japan.Journal of Geosciences,Osaka City University Vol.32,Art.4, P. 91-121
- Hustedt,F. (1937-1938) Systematische und ökologische Untersuchungen über die Diatomeen-Flora von Java, Bali und Sumatra Nach dem Material der Deutschen limnologischen Sunda-Expedition.teil I ~ III, Band.15, P. 131-506, Band.16, P. 1-155, 274-394.
- 伊藤徳治・朝田二郎・中島豊志・西尾 順 (1988) 八ヶ岳地域の新鮮統および更新統から産出した植物遺体・花粉化石. 地図研専報, 34, 191-203.
- 伊藤良永・堀内誠示 (1991) 草生珪藻の現在における分布と山環境解析への応用. 珪藻学会誌, 6, P. 23-45.
- Krammer,K.and Lange-Bertalot,H. (1986) Bacillariophyceae.teil 1,Nabiciaceae.Band 2/1 von : Die Suesswasserflora von Mitteleuropa,876 P.,Gustav Fischer Verlag.
- Krammer,K.and Lange-Bertalot,H. (1988) Bacillariophyceae.teil 2,Epithemiaceae,Baxillariaceae,Suriellaceae. Band 2/2 von : Die Suesswasserflora von Mitteleuropa,536, ,Gustav Fischer Verlag.
- Krammer,K.and Lange-Bertalot,H. (1991 a) Bacillariophyceae,Teil 3,Centrales,Fragilariaceae,Eunotiaceae.Band 2/3 von : Die Suesswasserflora von Mitteleuropa,230 P.,Gustav Fischer Verlag.
- Krammer,K.and Lange-Bertalot,H. (1991 b) Bacillariophyceae,Teil 4,Achnanthaceae,Kritische Ergänzungen zu Nabicia (Lineolatae) und Gomphonema.Band 2/4 von : Die Suesswasserflora von Mitteleuropa,248 P.,Gustav Fischer Verlag.
- Krammer,K. (1992) PINNULARIA,eine Monographie der europäische taxa.BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA BAND 26, P. 1-353, BERLIN · STUTTGART.
- 熊井久男 (1994) 日本各地の鮮新～更新統との対比. アーバンクボタ, 33, P. 37-39.
- Lowe,R.L. (1994) Environmental Requirements and pollution Tolerance of Fresh-Water Diatoms.334 P. In Environmental Monitoring Ser.EPA Report 670/4/74/005, Nat.Environmental Res.Center Office of Res. Develop., U.S. Environ.Protect.Agency,Cincinnati.
- 信州研究グループ (1969) 中部地方山間盆地の第四系. 地図研専報, 15, P. 217-262.
- 八ヶ岳山麓の中部更新統. 地図研専報, P. 53-89.

図版 I 珪藻化石



1

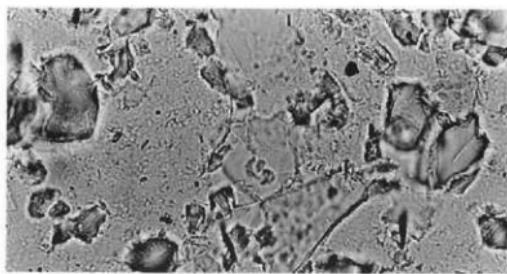
2



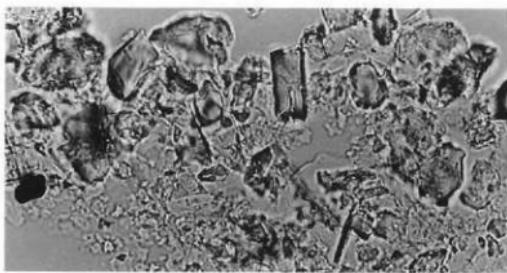
3

$10 \mu\text{m}$

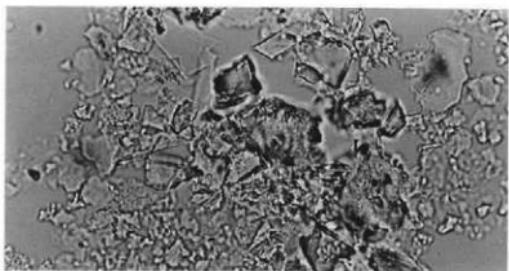
$10 \mu\text{m}$  (4, 5, 6)



4



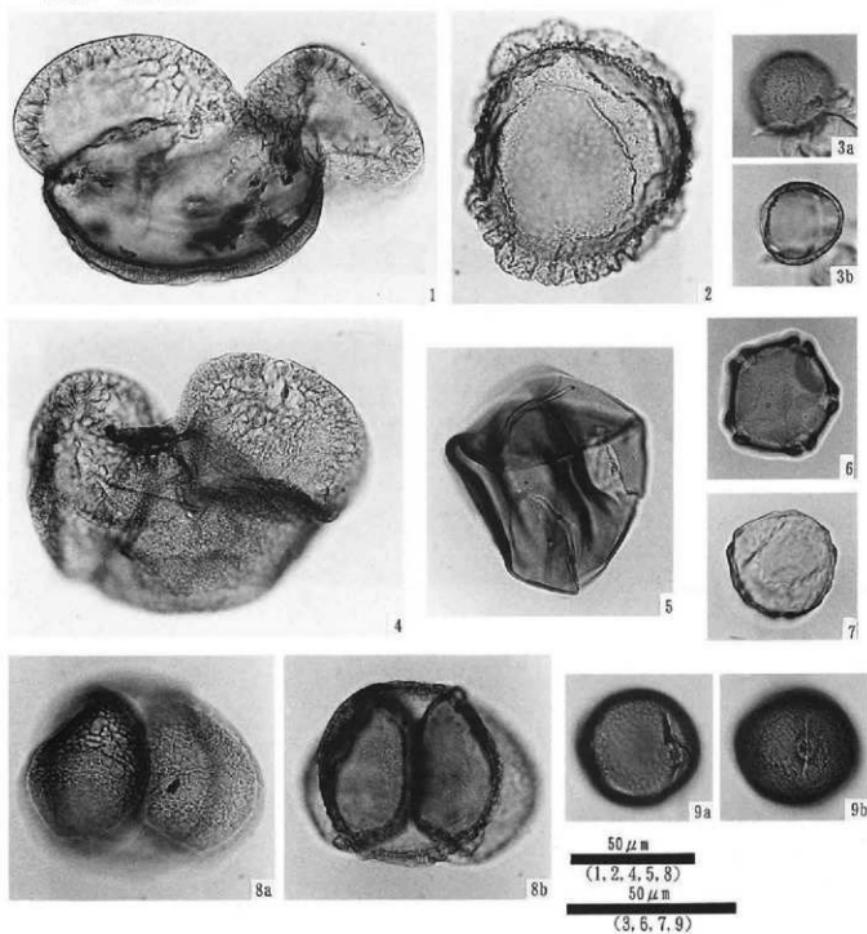
5



6

1. *Cymbella cistula* (Ehr.) Kirchner (I層)
2. *Rhopalodia novae-zealandiae* Hustedt (I層)
3. *Rhopalodia gibellura* (Ehr.) O.Muller (I層)
4. II層の状況写真
5. III層の状況写真
6. VI層の状況写真

図版2 花粉化石

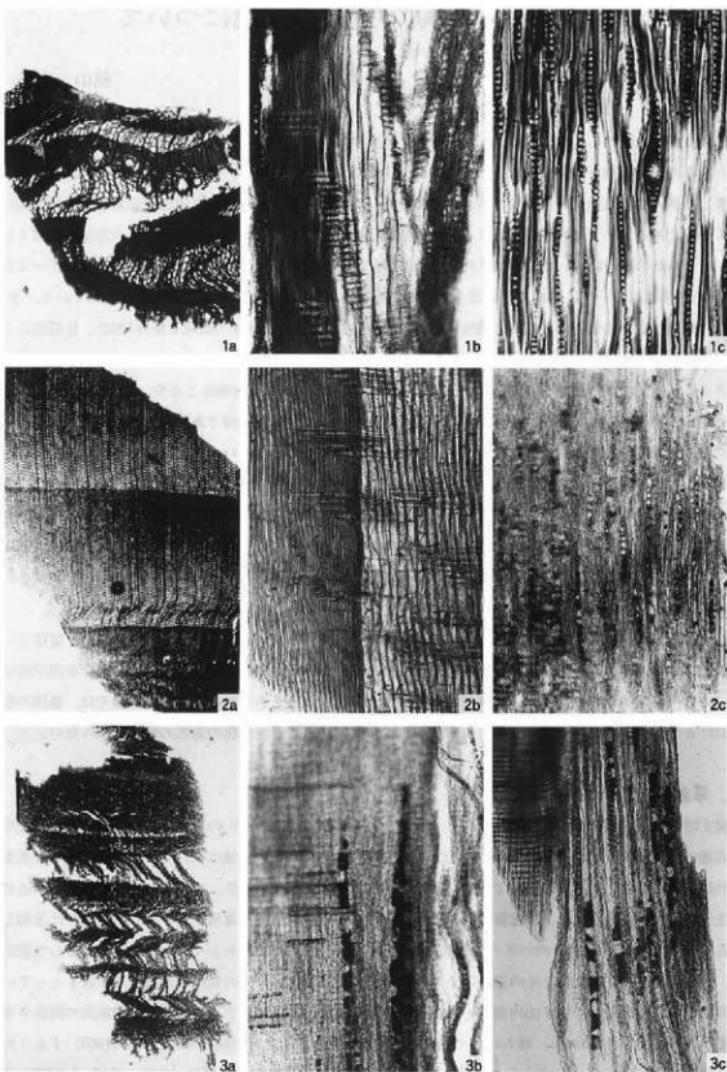


1. モミ属 (IV層)  
 3. コナラ属コナラ亜属 (I層)  
 5. カラマツ属 (IV層)  
 7. ニレ属—ケヤキ属 (I層)  
 9. ブナ属 (I層)

2. ツガ属 (IV層)  
 4. トウヒ属 (IV層)  
 6. ハンノキ属 (I層)  
 8. マツ属 (IV層)

50 μm  
 (1, 2, 4, 5, 8)  
 50 μm  
 (3, 6, 7, 9)

図版3 木材化石



1. トウヒ属(白州町役場展示埋没樹)

2. モミ属(田層)

3. 鈎葉樹(I層)

a:木口, b:径目, c:板目

# 縄文時代草創期の遺跡の立地について

秋山 圭子

## はじめに

縄文時代に開始した定住生活が、それまでのネガティブな社会からの脱却を成功させた第一の要因であるとする西田の指摘は、定住革命として大々的に提唱された（西川1981）。そしてさらに日本において定住化が著しく進んだのは縄文時代早期であり（原川1983・84、戸川1983）、本格的に定住が定着したのは前期に入つてからであるという見方が提示される（西川1980・前掲、小林1983、岡村1987他）。この定住の指標としては、いくつかの論考においても指摘されるよう（西田1980・前掲、小林1983、岡村1987、A.テスター1995他）、ある集落において、季節性の資源を複数の季節にわたって獲得していることがあげられている。また、在地の地域生態の変化に応じた適応戦略の保持（安齋1994）、住居状遺構の出現（桜井1992）、住環境にかける労働時間の長さ（小林1986、渡辺1966）などもその指標としてあげられている。

さらに、定住とはいえない全く移動しない例はほとんどない（Susan Kent1989）ことや、縄文時代における「定住」が、一年のうちに拠点が数回移動する（羽生1990）いわば領域内回帰であるといった指摘は近年多くみられる。縄文時代の定住化研究においてもこの認識は、浸透しているといっていいだろう。

こうしたなか縄文時代草創期は、日本における定住化の初期として認識された。しかし該期の定住の過程は、遺構発見数の少なさやその多様性もあって遺跡あるいは遺構ごとの単独の研究ばかりが目立ったのが実状だった。最近になって、内水面漁労や堅果類利用の活発化が定住化を高め（佐藤1992、南宮1993）、遺跡内部の場の分化と数遺跡にまたがる集団の場の分化がおこった（桜井前掲、望月1993）ことなどが指摘されるようになった。

しかしここまで、居住地選択の条件、つまり立地についての分析がほとんどなされていない。定住という現象において、草創期の集団がその領域内のどこにどんな遺跡を形成したか。近年、当時彼らが選び設定したであろう化環境について、広い地域での比較分析が可能になってきている。そこで本論では、集団の領域における遺跡の配置を立地という観点から分析し、草創期における定住化の過程の解明を試みたい。

## I. 草創期における領域研究と課題

縄文時代の領域研究の中で、清水はいくつかの「地縁集団」（水野1969）の集合が社会規制のもとで使用した共通の生産地域を「集団領域」と表現した（清水1973）。西木はその領域について、居住地は様々な生業活動の結節点であり、生業圏の中心である必要はないと指摘する（西木1985）。また小林は、遺跡あるいは当時の生活様式の多様性をふまえ、遺跡の居住期間間に注目して立地・遺物・遺構から6つのパターンに分類している（小林1973）。そしてそのパターンの組み合わせ（領域や遺跡群）をセトルメントシステムとして認識した。これは遺跡の空間配置とその遺跡同士の関連性から、領域のあり方の規則を分析する手法をとっている。

草創期の領域研究は、まず山内清男と佐藤達夫が神子柴遺跡の性格をアボと指摘し、遺跡間の関係を考察している（山内・佐藤1962）。彼らはこの遺跡を「石器製作地と消費地の間に介在」（山内1969）する「社会的余廻」（佐藤1974）の表象として位置づけた。また采島はその機能の多様性（集積と埋納）を指摘し、アボを「領域内の回帰地點」と位置づけた（采島1990）。一方、川中は長野県仲町遺跡を遺物分布から墓と認定し、領域内の「墓域」の存在と定住性の高さを指摘している（川中1992）。

さらに河川の規模と立地から、該期前半には遺跡は河川合流点の低位段丘に立地し内水面漁労の発達を読み取った研究（桜井1993・94）、鶴見川流域の遺跡の分布から、流域ごとの領域が展開されたと指摘する研究（坂本1986、1996他）、遺跡の立地において重層化を指摘した研究（村田・増子1978）などがみられる。また、東京都前川耕作跡の調査（町田ら1977・81・83）を縦縦として、居住地と狩場の空間的配置の復元を可能とした慶應大学藤沢キャンパス内遺跡など（桜井他1992）大規模な面積の遺跡報告が増加し、その遺跡の全域を分析対象とした総合的な領域研究もなされるようになっている。

以上、該期の集団領域についての先行研究をみてみると、いずれも石器製作技術、生業、遺跡立地において「分化」「重層化」を指摘する内容になっていることに気づく。この指摘は、白石によって、領域内の石材原産地・生業活動の場・集落がそれぞれ分化し、中間にテボを介在して経済的に集束する「集団構造」として理論化される（白石1994）。

こうした先行研究は、該期の特殊遺構のみの分析から社会全体を考察する矛盾、そして全国各地から「寄せ集めた」いくつかの遺跡の分析から具体的な領域や集団構造を捉えようとする矛盾を徐々に解決しつつあるように見える。しかし先に述べたとおり、定住化の重要な要素である立地についての分析が行われていない。そこで本論では、その遺跡の立地に着目して、該期の集団領域の中での場の配置を分析していく。

## II. 分析の方法と手順

### 1. 対象地域と時期について

本論では多摩丘陵・相模野台地の草創期遺跡を対象に分析を進めたい。この地域は、近年の開発調査によって多くの該期遺跡、特に大規模発掘の遺跡がいくつも報告されており、遺跡内の場の配置分析がしやすい地域である。また、大きな河川の上流から下流までがその範囲内に含まれるため、定住や立地傾向と河川との関連性が、分析結果に反映されうるということもこの地域を選んだ理由である。

また、対象時期についてだが、本研究では縄文時代草創期前半を対象とする。調査年（調査年1989）に照らし合わせると段階Ⅹおよび段階Ⅺに該当する時期、加えてそれにやや後続すると思われる花見山遺跡石器群までを取り扱うこととする。また、なすな原遺跡第2地区のB.C地点出土遺物は段階Ⅹであり、同L.M地区はそれ以降であると思われる。ここでは立地傾向の把握という目的上、細段階を設定せずに分析を試みたい。

### 2. 分類基準と分析方法

本論では、地域的な視点での遺跡の立地傾向分析をおこなっていく。

遺跡は、それぞれの出土遺物の組成によって分類する。まず出土遺物を大きく4グループに分け（表1）、遺跡ごとに各グループの出土量を算出する。そしてそれをもとに、遺跡を分類する（表2）。

こうした遺物組成による分類からは遺跡の機能がある程度推定されるであろうから、遺跡の機能と立地の

表1) 遺物のグループ

尖頭器類	尖頭器・有茎尖頭器・石錐・細石刃
剥片類	剥片・碎片・未成品・石核
加工工具類	石斧・搔器・削器・礫器・石錐・ビエスエスキーユ・敲打器
土器	

表2) 遺跡の分類

A		尖頭器類のみ (一点あるいは数点) 出土する遺跡
B	1	尖頭器類 + 加工具類 出土する遺跡
	2	尖頭器類 + 刻片類 出土する遺跡
C	1	土器のみ 出土する遺跡
	2	土器 + 尖頭器類 出土する遺跡
	3	土器 + 尖頭器類 + 加工具類 出土する遺跡
	4	土器 + 加工具類 + 刻片類 出土する遺跡
D	4種すべて 出土する遺跡	
E	加工工具類のみ 出土する遺跡	

関連性の有無について検討できるだろう。また組成分類の際、遺物について割合での表示はしない。これは、出土割合による分類のみでは遺跡の規模(出土量)による分類が不可能となるためである。そこで出土遺物量とその組成を同時に示し、効果的に分類していくこととする。

ところで、石器の機能を安易に推測することの危険性は、多くの石器研究者によって指摘されている(阿子島1989、橋本1983ほか)。ここで加工工具類とした一連の石器種に関しては、むしろ上記2グループの機能には入らないもの、あるいは一つの機能に一概におさまらないと思われるもののグループであると表現した方がいいかもしれない。ここではその流動的な機能定義自身をグループの性格としたい。

### III. 鶴見川流域の遺跡立地 (表3・図1)

多摩丘陵の緩やかな斜面が長く続く地形の中を、鶴見川・多摩川・帷子川が流れている。鶴見川流域では計82の該期の遺跡が発見されている。主な支流は矢上川・早瀬川・大熊川・谷本川・恩田川である。

#### 1. 恩田川流域

##### ④ げんじ山遺跡 (図2)

C類。恩田川流域の標高60mの北向き斜面に立地する。微隆起線文土器1点、有茎尖頭器2点が出土している。

##### ⑤ 宮ノ前遺跡 (図3)

D類。横浜市緑区長津田町宮の前3325に所在する。谷面に立地し、標高51m、岩川との比高差は11mである。土器を4個体(30片)、尖頭器1点、有茎尖頭器4点、石鏃2点、ドリル1点を出土している。

##### ⑥ 宮ノ前南遺跡 (図3)

D類。横浜市緑区長津田町玄海3758に所在する。標高51mの丘陵の斜面に立地し、岩川との比高差は11m。微隆起線文土器1点、八形文土器1点、打製石斧3点、尖頭器1点、敲石、磨石、石核、わずかのフレーク、縦石刃を出土するが、残念ながら、遺跡の平面分布図は、報告されていない。

##### ⑦ なすな原遺跡 (図4)

D類。町田市成瀬1号312-3に所在する。恩田川とそこに流れ込む小川の合流点近くに、東西に3つ並んだ北向きに張り出した台地がある。その各台地上は西側の台地からNo.1～No.3地区と呼ばれ、うちNo.1とNo.2

から燕期の遺物が出土している。

・なすな原遺跡No1地区

D類。標高52mの台地上に立地する。台地の西壁を小川が流れる。比高差は10m。また北に300mのところに恩田川がある。出土遺物は、縫隙起線文土器が8個体、尖頭器7点、有茎尖頭器1点、打製石斧2点、礫器2点、網石刃1点、剝片20点である。台地の先端部に向かって、土器の出土はまとまっており、尖頭器は、台地の付け根側に出土する。礫器と打製石斧がセットで出土している。

・なすな原遺跡No2地区

D類。標高51mの台地に立地する。台地の東斜面のL.M地点と、台地中央のB.C地点に分布がわかる。尖頭器の形態、有茎尖頭器の組成率などから、B.C地点は、L.M地点よりも古い時期のものであることがわかる。第1地区と同じく北側の恩田川との比高差は10mである。土器3個体、尖頭器9点、剝片類270、加工工具類6である。L.M地点もB.C地点も剝片主体の組成である。両地点共に石器集中地点内での明確な場所の分離は見られず、剝片剝離がおこなわれたことがわかる。また、L.M地点では、石器集中の東側から土器の出土がみられる。

## 2. 谷本川流域

⑩ 月出松遺跡（図5）

D類。横浜市緑区加賀原1~8~18に所在する。谷本川東岸の高位台地から南にのびるやせ尾根の頂部から南西斜面にかけて遺物が分布している。標高59m。出土遺物は縫隙起線文土器3個体(59片)、安山岩製の石鎌1点である。土器は「斜面に沿って細長く広がり、斜面上方から投棄したかのよう」(坂本1996)な分布をみせている。遺跡の組成は、能見堂遺跡と対照的に、土器主体の組成である。尾根状の台地の斜面に寄かって七器が分布している。この状況は、Na21げんじ山遺跡の立地状況と、きわめて類似している。

⑪ 花見山遺跡（図6）

D類。横浜市都筑区花見山15~35に所在する。標高53mの低位台地に立地し、大熊川谷との比高差は約5~10m。谷本川、大熊川、早瀬川の接点である。

竪穴式造営を1つ持ち、配石は3基見られる。土器を123個体出し、剝片類を994点出土している。礫器、母指状振器の出土が多いのも特徴である。1号住居跡は母指状振器と尖頭器と剝片類がめだつ。また1号住居出土の尖頭器は、未製品と思われるものが多い。また1号住居跡との境界が引きづらい3号配石でも剝片類が主体的に入る。遺跡全体の分布を見ても、1号住居跡周辺には、有茎尖頭器と石鎌という、明確な分離が見られる。土器の型式でみても、この造営の間には一段階の差が見られる。しかし、両時間で、遺物量の差はあるが、各グループの遺物をまんべんなく出土している点は共通しているよう。

⑫ 能見堂遺跡（図7）

D類。横浜市都筑区加賀原2~12~18に所在する。谷本川流域。低位台地の中央南側の標高39m地点に立地する。遺物は、尖頭器13点、有茎尖頭器6点、石鎌2点、スクレイバ~4点、打製石斧1点、石核1点、剝片2,000点以上、縫隙起線文土器2~3個体(20片)で、7ブロック4地点に分布している。うち一つのブロックには礫群が見られる。剝片主体の組成である。

## 3. 鶴見川流域の遺跡立地の傾向（表3・図13）

尖頭器類のみの単発的出土の場合は、丘陵頂部あるいは丘陵斜面に立地することが多く、溝辺の同類の遺

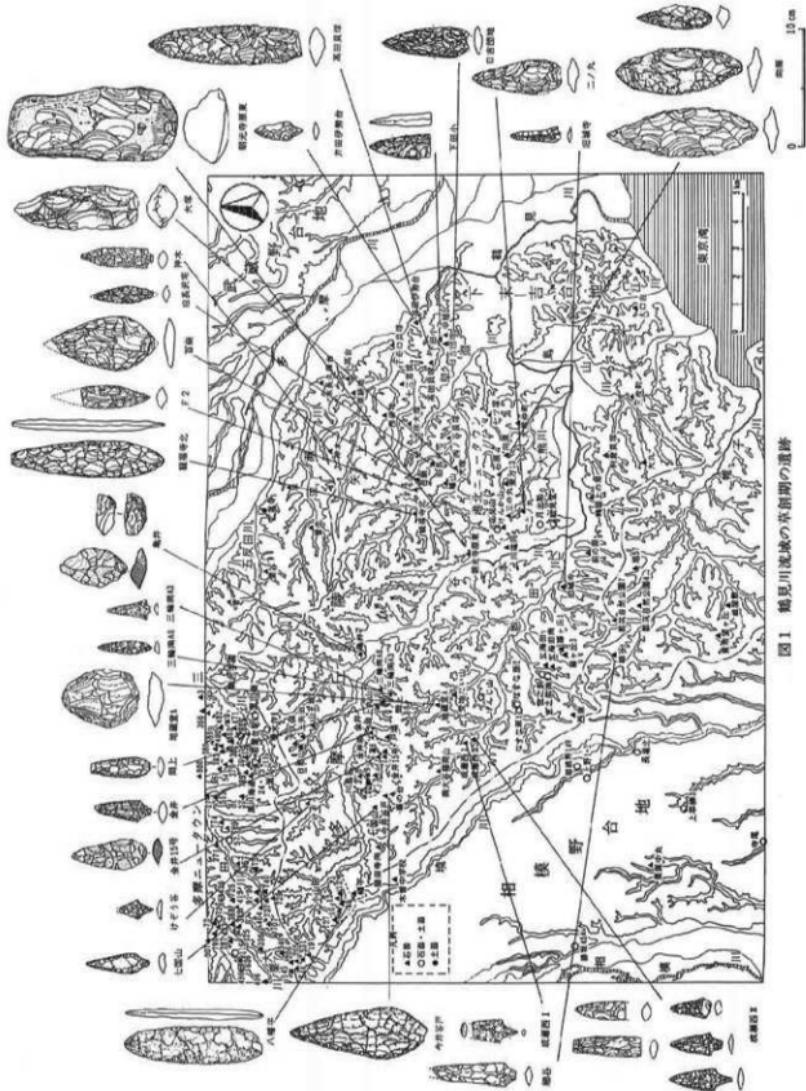


図1 鶴見川流域の草創期の遺跡

表3(1) 鶴見川流域の草創期遺跡分類

表3(2) 鶴見川流域の草創期遺跡分類

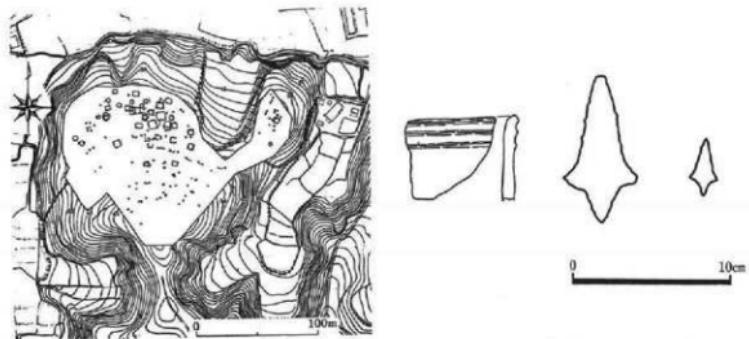
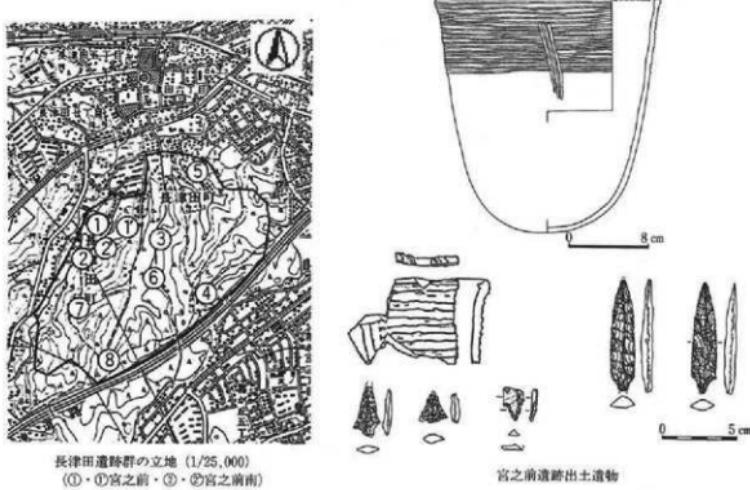


図2 げんじ山遺跡の立地と出土遺物



宮之前遺跡出土遺物



宮之前南遺跡出土遺物

図3 宮之前・宮之前南遺跡の立地と出土遺物

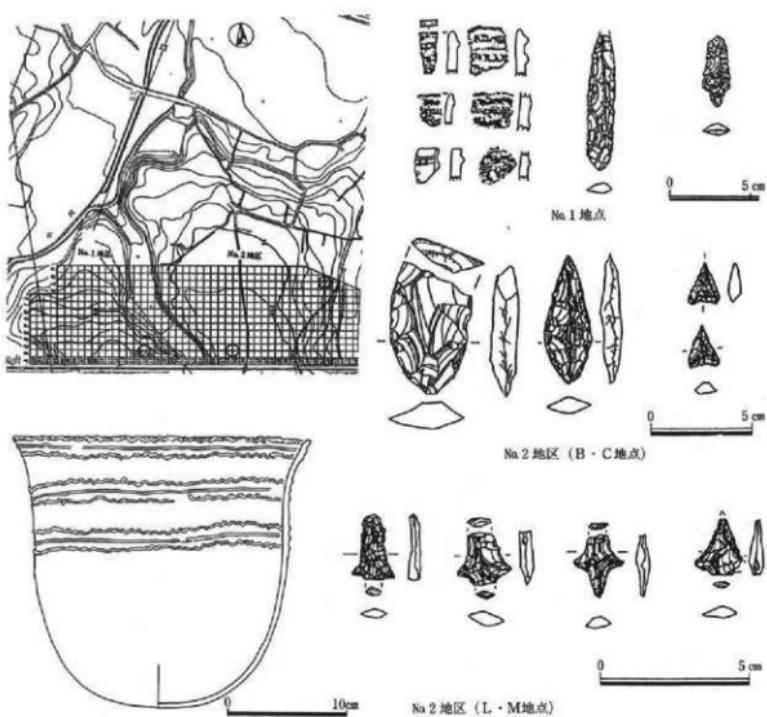


図4 なすな原遺跡の立地と出土遺物

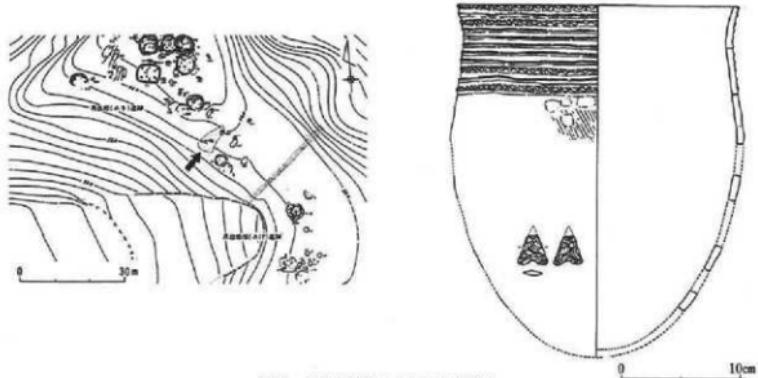


図5 月出松遺跡の立地と出土遺物

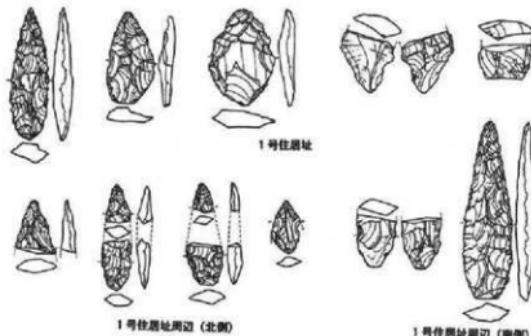
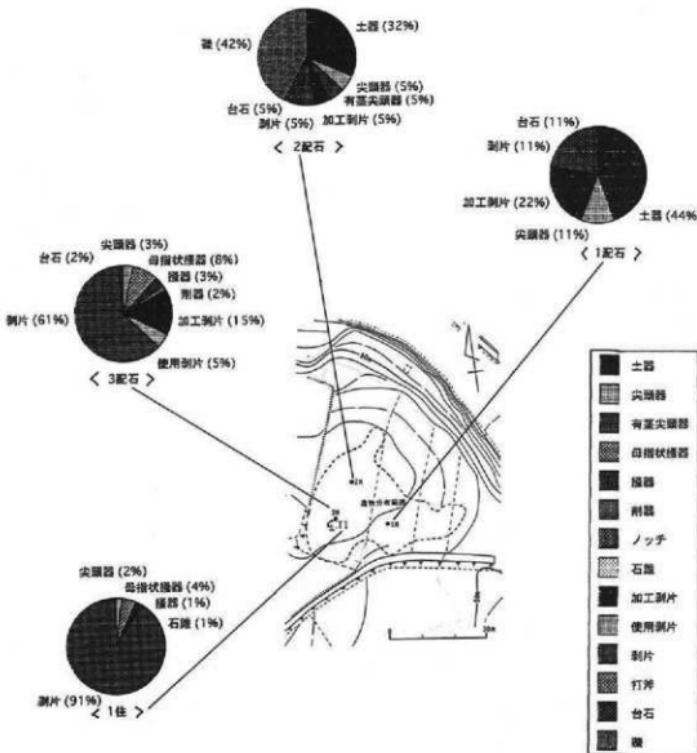


図6 花見山遺跡の立地と出土遺物

0 5 cm

跡との距離の制約などはみられなかった。

C類、D類に注目すると、谷本川流域と恩田川流域において、近隣の遺跡同士で、出土遺物組成がきわめて相互補完的な関係の遺跡が存在し、その中間に、4つの遺物グループをわりあいまんべんなく出土している遺跡が存在する。

これについては、能見堂遺跡と月出松遺跡の遺物組成の補完性が、以前から指摘されている（坂本前掲、小宮1990）。しかし、それと同様の傾向が、鶴見川をはさんだ恩田川でも見受けられた。土器を出土する遺跡が比較的密集している谷本川流域（花見山・能見堂・月出松遺跡）と、鶴見川を挟んだ西側の恩田川流域（宮の前・なすな原・げんじ山遺跡）においては、土器を主体とする月出松遺跡とげんじ山遺跡、剝片類を主体とする能見堂遺跡となすな原遺跡第2地区が、地域ごとに見るとそれぞれ相互補完的な値を見せてている。そしてさらに、東地区に、花見山遺跡と宮の前遺跡というまんべん無い組成の、類似したグラフの表示をする遺跡が存在する。

この三者の関係は、さらに、遺跡の標高の関係にもあらわされている（表1・図13）。土器主体の遺跡は、流域内の三者の中で、もっとも高い標高を示し、剝片主体の遺跡は、もっとも低い値を示している。そして、その中間にまんべんない組成の遺跡の標高が入るのである。

遺跡内部での分離は、花見山遺跡でわずかにみられたのみである。その花見山遺跡もD類の遺跡であり、母指式搔器・尖頭器の分布が1サ住居周辺に偏ることの他には、著しい組成差があまり見られない。同様に、他の遺跡も各グループの遺物を少しづつであれ出土していることから、遺跡自体の性格が、単独の専門的な性格（石器製作のみ、など）ではないことがうかがわれ、場の分離も若しくない。

C類の月出松遺跡とげんじ山遺跡は、尾根状の台地斜面にむかって土器が分布しており、共通したあり方である。

#### IV. 多摩川流域の分析（表4・図1）

多摩川流域には計19の遺跡がある。多摩ニュータウン遺跡群という広大な遺跡群が存在するが、ここではその中から、土器の出土した遺跡であるNo116、No125、No426、No796について、分析していく。多摩川の支流は、五反田川・平瀬川・三沢川・大栗川・乞田川である。

まず、地域的な視点で遺跡の組成分類・分析をおこなう。

##### 1. 三沢川流域

###### ① 采木IV遺跡（図8）

C2類。川崎市多摩区黒川390に所在する。標高120~130mの山から張り出した北向きの縦斜面に立地する。遺跡から北に200mに三沢川が流れる。標高105m、三沢川との比高差は30m。出土遺物は砂質泥岩製の尖頭器1点、微隆起線文土器2片である。

###### ② 勉学園校舎内遺跡（図9）

C3類。稲城市板浜3-228に所在する。標高100mの台地縁辺部に立地する。三沢川との比高差は15m。出土遺物は土器1点、尖頭器1点、有茎尖頭器2点、搔器1点である。

###### ③ 黒川東遺跡（図10）

C3類。川崎市多摩区黒川527に所在する。舌状台地に立地し、三沢川との比高差は20m。土器を2個体、尖頭器2点、有茎尖頭器1点、石斧1点、石錐1点が出土している。

No.	地名	河川名	分段	土壤	安替	有石	无石	小计	石岸	冲积带	石他	小计	冲积带	石他	小计	冲积带	石他	小计	冲积带	石他
1	海沿	海河	分段	土质	安替	有石	无石	小计	石岸	冲积带	石他	小计	冲积带	石他	小计	冲积带	石他	小计	冲积带	石他
2	北运河	北运河	1	C1		2		3				1		1		1		5		1
3	通惠河	北运河	2	C1		2		3				1		1		1		100		1
4	通惠河	北运河	3	C1		2		3				1		1		1		100		1
5	通惠河	北运河	4	C1		2		3				1		1		1		100		1
6	通惠河	北运河	5	C1		2		3				1		1		1		100		1
7	通惠河	北运河	6	C1		2		3				1		1		1		100		1
8	通惠河	北运河	7	C1		2		3				1		1		1		100		1
9	通惠河	北运河	8	C1		2		3				1		1		1		100		1
10	通惠河	北运河	9	C1		2		3				1		1		1		100		1
11	通惠河	北运河	10	C1		2		3				1		1		1		100		1
12	通惠河	北运河	11	C1		2		3				1		1		1		100		1
13	通惠河	北运河	12	C1		2		3				1		1		1		100		1
14	通惠河	北运河	13	C1		2		3				1		1		1		100		1
15	永定河	永定河	1	A		2		3				1		1		1		100		1
16	永定河	永定河	2	A		2		3				1		1		1		100		1
17	永定河	永定河	3	A		2		3				1		1		1		100		1
18	永定河	永定河	4	A		2		3				1		1		1		100		1
19	永定河	永定河	5	A		2		3				1		1		1		100		1
20	永定河	永定河	6	A		2		3				1		1		1		100		1
21	永定河	永定河	7	A		2		3				1		1		1		100		1
22	永定河	永定河	8	A		2		3				1		1		1		100		1
23	永定河	永定河	9	A		2		3				1		1		1		100		1
24	永定河	永定河	10	A		2		3				1		1		1		100		1
25	永定河	永定河	11	A		2		3				1		1		1		100		1
26	永定河	永定河	12	A		2		3				1		1		1		100		1
27	永定河	永定河	13	A		2		3				1		1		1		100		1
28	永定河	永定河	14	A		2		3				1		1		1		100		1
29	永定河	永定河	15	A		2		3				1		1		1		100		1
30	永定河	永定河	16	A		2		3				1		1		1		100		1
31	永定河	永定河	17	A		2		3				1		1		1		100		1
32	永定河	永定河	18	A		2		3				1		1		1		100		1
33	永定河	永定河	19	A		2		3				1		1		1		100		1
34	永定河	永定河	20	A		2		3				1		1		1		100		1
35	永定河	永定河	21	A		2		3				1		1		1		100		1
36	永定河	永定河	22	A		2		3				1		1		1		100		1
37	永定河	永定河	23	A		2		3				1		1		1		100		1
38	永定河	永定河	24	A		2		3				1		1		1		100		1
39	永定河	永定河	25	A		2		3				1		1		1		100		1
40	永定河	永定河	26	A		2		3				1		1		1		100		1
41	永定河	永定河	27	A		2		3				1		1		1		100		1
42	永定河	永定河	28	A		2		3				1		1		1		100		1
43	永定河	永定河	29	A		2		3				1		1		1		100		1
44	永定河	永定河	30	A		2		3				1		1		1		100		1
45	永定河	永定河	31	A		2		3				1		1		1		100		1
46	永定河	永定河	32	A		2		3				1		1		1		100		1
47	永定河	永定河	33	A		2		3				1		1		1		100		1
48	永定河	永定河	34	A		2		3				1		1		1		100		1
49	永定河	永定河	35	A		2		3				1		1		1		100		1
50	永定河	永定河	36	A		2		3				1		1		1		100		1
51	永定河	永定河	37	A		2		3				1		1		1		100		1
52	永定河	永定河	38	A		2		3				1		1		1		100		1
53	永定河	永定河	39	A		2		3				1		1		1		100		1
54	永定河	永定河	40	A		2		3				1		1		1		100		1
55	永定河	永定河	41	A		2		3				1		1		1		100		1
56	永定河	永定河	42	A		2		3				1		1		1		100		1
57	永定河	永定河	43	A		2		3				1		1		1		100		1
58	永定河	永定河	44	A		2		3				1		1		1		100		1
59	永定河	永定河	45	A		2		3				1		1		1		100		1
60	永定河	永定河	46	A		2		3				1		1		1		100		1
61	永定河	永定河	47	A		2		3				1		1		1		100		1
62	永定河	永定河	48	A		2		3				1		1		1		100		1
63	永定河	永定河	49	A		2		3				1		1		1		100		1
64	永定河	永定河	50	A		2		3				1		1		1		100		1
65	永定河	永定河	51	A		2		3				1		1		1		100		1
66	永定河	永定河	52	A		2		3				1		1		1		100		1
67	永定河	永定河	53	A		2		3				1		1		1		100		1
68	永定河	永定河	54	A		2		3				1		1		1		100		1
69	永定河	永定河	55	A		2		3				1		1		1		100		1
70	永定河	永定河	56	A		2		3				1		1		1		100		1
71	永定河	永定河	57	A		2		3				1		1		1		100		1
72	永定河	永定河	58	A		2		3				1		1		1		100		1
73	永定河	永定河	59	A		2		3				1		1		1		100		1
74	永定河	永定河	60	A		2		3				1		1		1		100		1
75	永定河	永定河	61	A		2		3				1		1		1		100		1
76	永定河	永定河	62	A		2		3				1		1		1		100		1
77	永定河	永定河	63	A		2		3				1		1		1		100		1
78	永定河	永定河	64	A		2		3				1		1		1		100		1
79	永定河	永定河	65	A		2		3				1		1		1		100		1
80	永定河	永定河	66	A		2		3				1		1		1		100		1
81	永定河	永定河	67	A		2		3				1		1		1		100		1
82	永定河	永定河	68	A		2		3				1		1		1		100		1
83	永定河	永定河	69	A		2		3				1		1		1		100		1
84	永定河	永定河	70	A		2		3				1		1		1		100		1
85	永定河	永定河	71	A		2		3				1		1		1		100		1
86	永定河	永定河	72	A		2		3				1		1		1		100		1
87	永定河	永定河	73	A		2		3				1		1		1		100		1
88	永定河	永定河	74	A		2		3				1		1		1		100		1
89	永定河	永定河	75	A		2		3				1		1		1		100		1
90	永定河	永定河	76	A		2		3				1		1		1		100		1
91	永定河	永定河	77	A		2		3				1		1		1		100		1
92	永定河	永定河	78	A		2		3				1		1		1		100		1
93	永定河	永定河	79	A		2		3				1		1		1		100		1
94	永定河	永定河	80	A		2		3				1		1		1		100		1
95	永定河	永定河	81	A		2		3				1		1		1		100		1
96	永定河	永定河	82	A		2		3				1		1		1		100		1
97	永定河	永定河	83	A		2		3				1		1		1		100		1
98	永定河	永定河	84	A		2		3				1		1		1		100		1
99	永定河	永定河	85	A		2		3				1		1		1		100		1
100	永定河	永定河	86	A		2		3	</											

新編川端の詩

考5 猪子川流域の墓例別清計分類

## 2. 大栗川流域

### ⑫ 多摩ニュータウン遺跡No125遺跡 (図11)

C 2類。標高91mの本遺跡は合流点近くの段丘に立地する。大栗川からの比高差は1m。土器1片、尖頭器2点、有茎尖頭器1点を出土している。

### ⑬ 多摩ニュータウン遺跡No116遺跡 (図12)

C 4類。大栗川流域の段丘緩斜面下部に立地し、標高105m、比高差は5m。土器23片、剥片類が多量に出土、加工工具は15点出土している。遺跡内の遺物分布は、石斧主体の場と礫器・加工礫・矢柄研磨器主体の場がやや分離した形を取っている。

### ⑭ 多摩ニュータウン遺跡No426遺跡 (図12)

D類。標高85mの台地先端部に立地し、大栗川との比高差10m。土器108片、尖頭器21点、有茎尖頭器1点、剥片1150点、右核8点、石斧6点の出土である。遺跡内の分布は、場の分布が2箇所に集中していて、その空白部分には有茎尖頭器の分布が重なる。

### ⑮ 多摩ニュータウン遺跡No796遺跡 (図11)

D類。剥片を2,000点出土する本遺跡では、袖子柴型石斧4点、尖頭器13点、土器60片を出土している。低段丘の標高90mに立地。比高差は1m。

## 3. 多摩川流域の遺跡立地傾向 (図14)

各遺跡の組成分類から把握された地域的特徴をまとめてみる。土器を出土している遺跡に注目し、各遺跡を組成ごとに分類、グラフ化して表した (図14)。

黒川地区では、C 2類の栗木IV遺跡のグラフは、土器主体の右むきの一辺形である。そしてC 3類の黒川東遺跡と鶴見学園遺跡のグラフは、上と左右に広がる二角形である。

ここで、各分類別に遺跡の標高と比高差を比べてみると、C 2類の栗木IV遺跡は標高が105m、比高差は30mである。つぎに、C 4類の黒川東遺跡は標高98m、比高差20m、駒沢学園遺跡は標高100m、比高差20mである。前節で見られた鶴見川の遺跡立地の傾向が、ここでも見られる。つまり、近隣のいくつかの遺跡では、C 2類の遺跡は標高が高いほうに、剥片主体の遺跡は標高の低いほうに立地し、中間にまんべんない組成の遺跡が存在するのである。

また、多摩ニュータウン遺跡では、C 2類のNo125は右向きの三角形、廻する剥片主体のNo116遺跡は、具体的な数量は不明だが、明らかにNo125の三角形と、対照的な形状の三角形になるであろう。そして、その周辺には、ここでもNo426、No796遺跡が存在する。遺跡間の距離を見てみると、補完的な組成の125遺跡と116遺跡、共通の組成の426遺跡と796遺跡がそれぞれ近い距離にある。また、426遺跡と796遺跡は支流の合流点に位置している。しかしこちらのほうは、鶴見川流域で見られたほどの完全な比高差の違いは見られない。

## V. 帽子川流域の分析

### 帽子川流域には7遺跡があるが、いずれもA類であった (表5)。

この地域は、遺跡数・出土遺物点数共に少なく、遺跡内部の分析が可能な遺跡や土器を出土する遺跡もないことから、前述の様な立地の傾向を見ることはできなかった。

しかし、入江川流域である⑥大口台遺跡をのぞいては、標高約70~80m台で河川との比高差が20m台と、平均した立地傾向を示している。

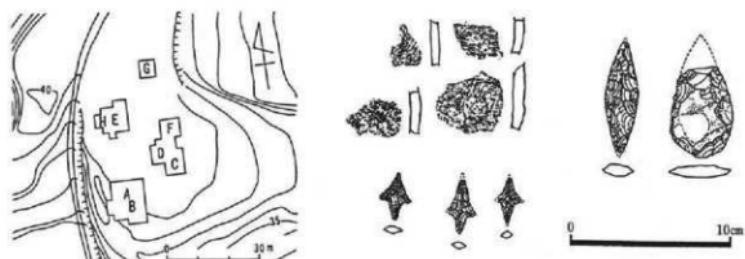


図7 能見堂遺跡の立地と出土遺物

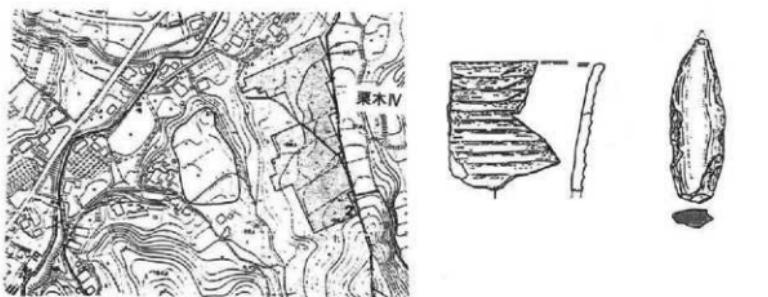


図8 栗木IV遺跡の立地と出土遺物

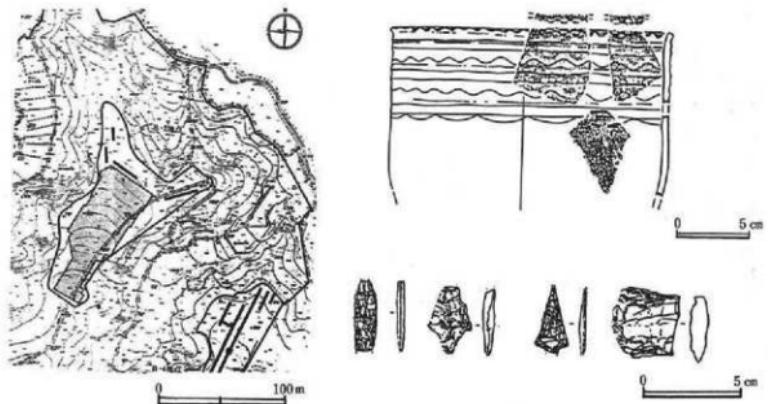


図9 駒沢学園遺跡の立地と出土遺物

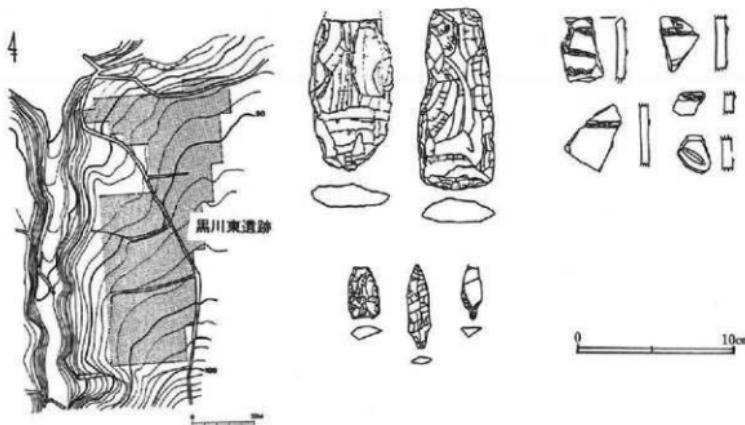
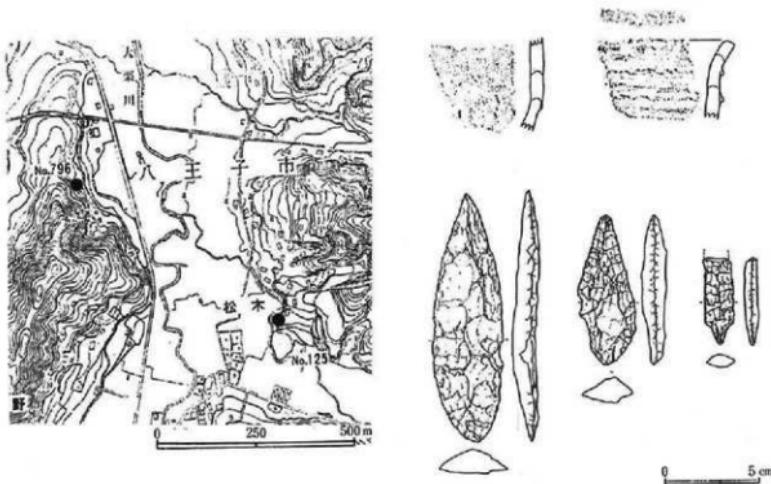


図10 黒川東遺跡の立地と出土遺物



No.125・No.796遺跡の立地

No.125遺跡出土遺物

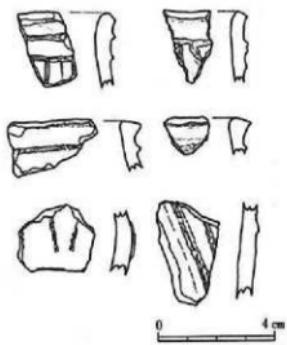
図11 多摩ニューエクウンNo.125・No.796遺跡



No.116遺跡の立地



No.426遺跡の立地



No.116遺跡出土遺物

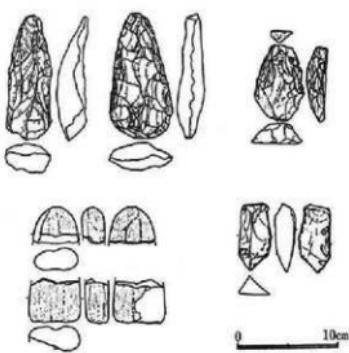


図12 多摩ニュータウンNo.116・No.426遺跡

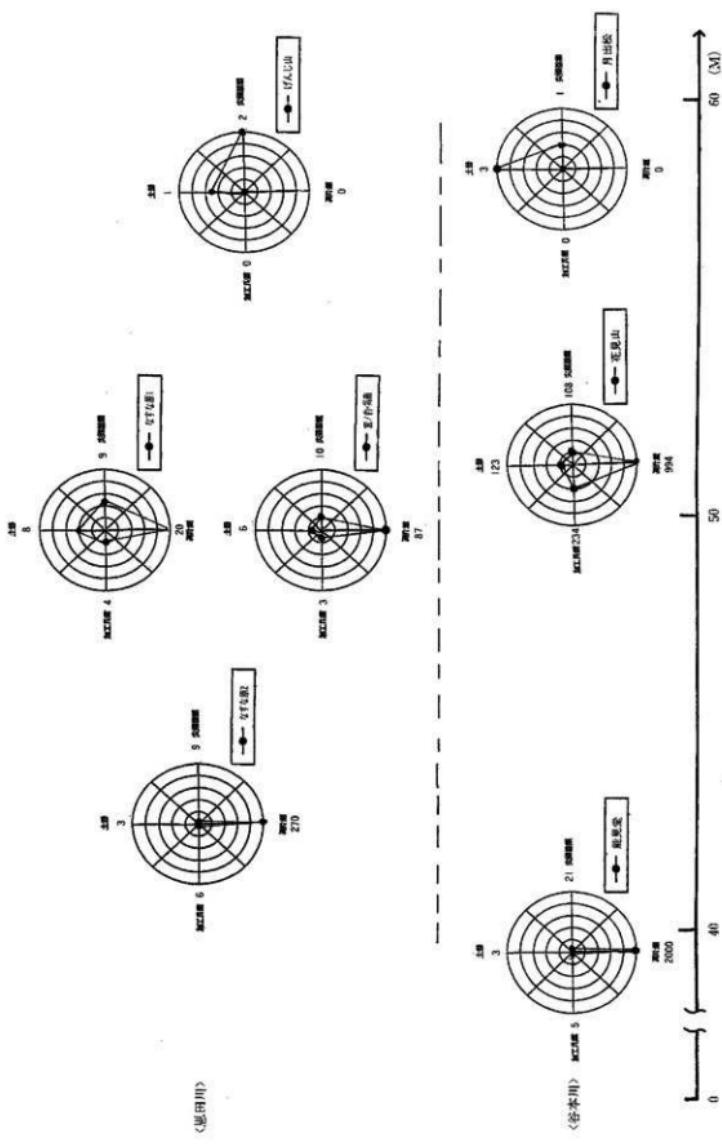
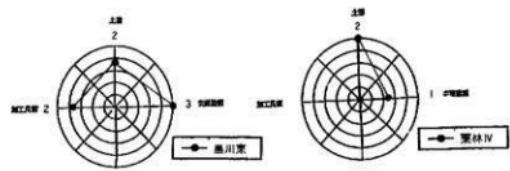
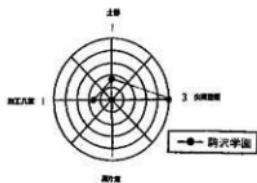


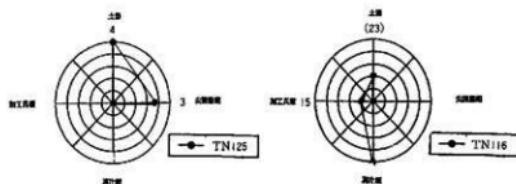
図13 鶴見川流域の漬地立地



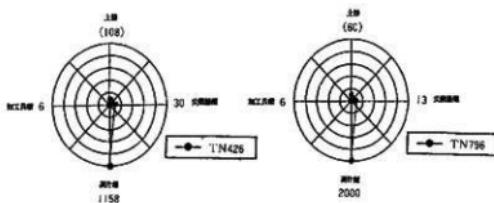
〈三沢川〉



-----



（七四）



The diagram shows an elevation profile with height in meters (M) on the vertical axis and distance in meters (m) on the horizontal axis. The vertical axis has tick marks at 0, 80, and 100. The horizontal axis has tick marks at 0, 80, and 100. A curve starts at (0, 0), rises to a peak at approximately (20, 80), falls to a local minimum at approximately (40, 75), rises again to a higher peak at approximately (60, 90), falls to another local minimum at approximately (80, 85), and finally rises to end at approximately (100, 95). A vertical dashed line is drawn at x = 40, and a horizontal dashed line is drawn at y = 85.

図14 多摩川流域の遺跡立地

## VI. 繩文時代草創期の遺跡における領域

多摩丘陵において、土器を組成にもつ遺跡がいくつか集まるとき、土器主体で尖頭器類をもつ遺跡（C2類）は、その対照となる剥片主体でわずかな加工工具をもつ遺跡（C4類）よりも、標高の高い位置に立地することがわかった。そこには組成の補完と共に立地空間のちがい、つまり標高の差があわらされている。また、その二者の間には、必ずまんべんない組成をもつ遺跡（D類）が存在する。

この法則性は、鶴見川の流域の2支流でそれぞれみられ、さらに、多摩川の流域においてもほぼ同じ法則が機能していたことがわかった。そして、唯子川流域における分析からは、土器の入らない組成の場合と、河川を軸にした関連が秀譲である場合は、その法則が見られないということがわかった。

つまりこの多摩丘陵において、遺跡は支流ごとに3遺跡ほど集まっており、まんべんない組成の遺跡、いわゆる居住地を中心に、それよりも標高の低い場所に石器製作の性格の強い遺跡が、標高の高い場所に狩場の性格の強い遺跡が立地し、相互に組成が補完している。

この各遺跡の遺物組成の補完と、遺跡立地を空間的に見た場合の標高の高低は、河川ごとに近隣の3遺跡がこうした立地傾向を出しており、河川と関連した傾向であることが考えられよう。

こうした傾向は、甲信地区でもみうけられるものである。

以降行った長野県佐久市下茂内遺跡、同岡谷市中島B遺跡、山梨県明野村神取遺跡などの分析では、剥片を多量に組成する尖頭器製作址が、河川との比高の差がない場所に立地する傾向があった（秋山1996）。遺跡は河川を意識して立地したと思われる。そしてやはり剥片主体で、遺跡の性格がより石器製作址に偏った遺跡が、標高の低い方つまり河川寄りに立地している。これは当時の社会において、活動の目的ごとに、行う場所が分化し始めていたことの表れだといえよう。また、当時在地産の石材を積極的に利用していたということもうかがえる。

以上のことから、この時期は、各地域で共通の大枠「在地産石材の利用・活動の場の分化・生業の分化による遺跡の標高的重層性」が存在したということが言えるだろう。

### 「定住化」のなかでの領域

縄文時代の定住化を早期から発達するとしてきた先行研究は、その多くの分析項目が竪穴式住居・炉などの中層的なものであった。しかし、そうした遺構がわずかに、多様な形で発見されてきた草創期前半には、実は当時の人々の選択の傾向が、はやくも旧石器時代とは異なるものになっており、定住化が深層の部分ではすでに確固たるものであったことがわかる。そのポイントとなったのは「分化」であろう。場が機能ごとに分化し、そこでの活動（生業）が分化する。そして在地の石材の利用でそれまでの広域の石材流通網から地域ごとに分化する。こうした変化が草創期前半の領域を作り出していると言えよう。そしてこの領域のありかたを当時の人々が安定して保持していたことが、草創期前半における尖頭器類の大量産出、安定した土器生産などを可能にしたのであろう。

### おわりに

定住化という言葉の陰には、当時の社会全体の大きな変化が影響していることは間違いない。該期の遺物・遺構の分析に加えて遺跡立地を分析することで、草創期前半には、居住地の選択について大きな特徴があつたことがわかった。今後、あらたに遺跡内部における場の分化のあり方を分析することで、当時の人々の領

域の構造が明らかになると思われる。また、今回分析した遺跡のはほとんどが在地産の石材を主体とする石器群の遺跡であったため、遠隔地からの石器入手の流れのなかでの分析もおこなう必要があろう。そして土器・石器群の変化との関連性も課題としていきたい。

最後になりましたが、本研究をおこなうに当たり、ご指導を頂きました多くの方々に感謝申し上げますと共に、お札を申し上げます。

#### 参考文献

- 栗島義明 1988 「御子柴文化をめぐる諸問題」『埼玉県埋蔵文化財事業団研究紀要』4  
1995 「日本列島における移行期の文化」『東アジア・極東の土器の起源』
- 坂本 彰 1997 「個の器」『利根川』18
- 桜井準也 1993 「縄文時代早創期前半の有舌尖頭器の平面分布について」  
『慶應大学湘南キャンパス内遺跡』1  
1993 「縄文時代における遺物の空間分析と考古学的地域について」  
『民族考古』1
- 佐藤宏之 1992 「北方系削片系細石器石器群と定住化仮説」『法政大学大学院紀要』29
- 白石浩之 1993 「神奈川県綾瀬市吉岡遺跡群D区で検出された埋納遺構」  
『考古学研究』42
- 白石浩之他 1994 「旧石器時代終末における石器群の諸問題」『神奈川県の考古学の諸問題』
- 諫訪間順 1996 「かながわにおける有舌尖頭器及び石鍬の出現時期について」  
『かながわの縄文文化の起源を探る』



## **II 発掘調査速報**



## 1. 北下条塚

所在地 荘崎市藤井町北下条240番地  
調査原因 個人住宅建設  
調査期間 平成10年10月26日～10月27日  
調査面積 112m<sup>2</sup>  
調査主体 荘崎市教育委員会  
担当者 山下孝司



### 1. 遺跡立地

北下条塚は、塩川右岸に広がる通称藤井平に所在した。藤井平は氾濫原で一見平坦地の様相を呈してはいるが、自然堤防状の微高地と埋没旧河道が所々に形成されており、遺跡並びに集落は微高地上に展開している。北下条塚は、北下条集落の北端に位置していた。標高約381m。

### 2. 調査経緯

土壇上の竹が伐採されていることが発見され、市教育委員会において地権者である名取克夫氏に確認をとったところ個人住宅地の造成工事にかかり削平することが判明した。このため市教育委員会では急遽地権者並びに工事業者との間で協議を行い、土壇の現状構造の把握と、築造方法の確認のために土壇を断ち割る断面発掘を行い、記録に留めることとし、宅地建設の工期を考えて早急に調査を実施することにした。調査は平成10年（1998）10月26日から2日間行った。

### 3 遺構と遺物

土壇は、宅地北側の東西方向に長さ26m、幅3m、東端での高さ1.7mの規模でのこっており、西端には石の祠が祭ってある。造成は東から祠の手前までの約20mを削平する予定であり、この部分の平面図作成と、東西2カ所の土壇断ち割りトレンチを掘って断面観察を行った。

土地の関係から現状では土壇基底部は北側が高く、南側が低く50cm～60cm程の比高差があり、部分的に石を積んでいる。石積みは北側に多いようである。土壇上半部は鉢を伏せたような断面形で、表層は竹の根が繁茂している。断面土壇観察では、構築方法は安定した砂地の上に形成された水田の上に土盛りしただけの構造で、版築のような掲き固めた形跡はなかった。基底部にみられる石積みは部分的であり、東西の断面を比較してみると本来土壇敷きはもう少し広めであったものが、後世削られて土留めの補強のために石が積まれたように思われる。

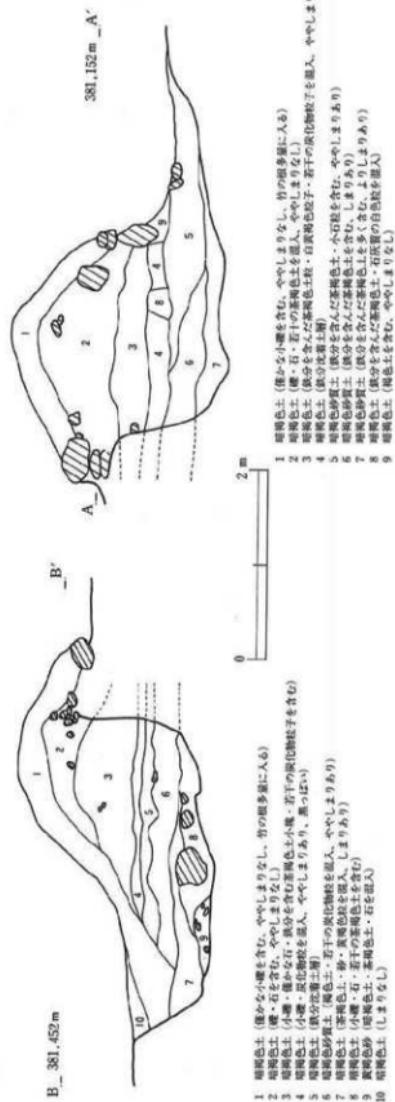
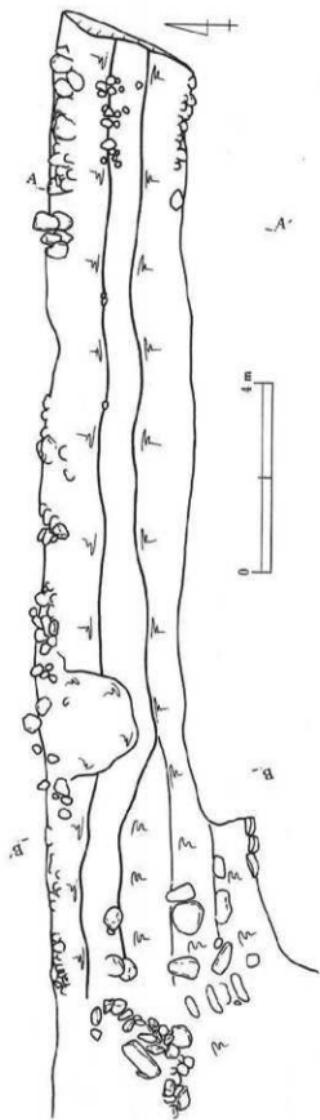
遺物は、表層から近世以降の陶器破片が出土し、それ以外には奈良・平安時代あるいはそれよりも古い段階の土器片や不明のものが数点ほど出土している。いずれも固化するには至らず、土壇の構築時期を決定するような遺物は出土しなかった。

### 4まとめ

『甲斐国志』に「小山田氏ノ宅跡 北下条村 方廿間許リ星形礎石等存セリ慈法院ニ天正五年五月五日小山田某ノ牌ヲ立ツ法名ニ慈法院宝山源光居士トアリ新府以前ノ古迹ト見エタリ」(巻四十七古跡部第十)と、小山田某の屋敷跡が北



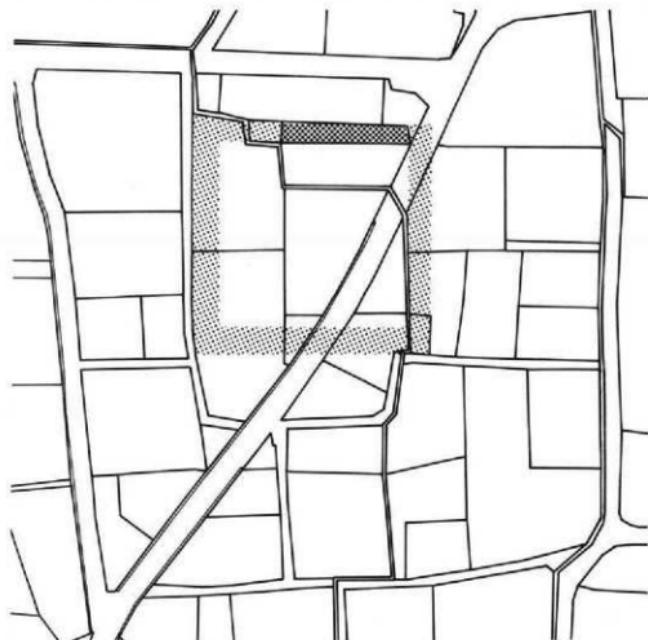
第1図 北下条墨址調査位置図 (1/500)



第2図 北下条選鉱場平面図 (1/100)・断面図 (1/50)

下条村にあり、この記載によれば土塁と礎石が残っていたことがわかり、一辺36mあまりの方形居館であったことが窺える。本土塁の詳細は不明であるが、土塁を延長して、東西の道に挟まれた部分を計測すると約45mとなり、地割等を考慮しながら土塁がめぐっていたと推定すると、その内側は36m四方の区画となる。おそらくこの部分が小山田某の屋敷跡とみて間違いないであろう。北西の角から水路を引き込み、屋敷地に水を通し南東の隅から排水している状況が見て取れることからも居館であったことが想定できよう。北下条集落はここから南にかけてのびており、微高地に展開している。

在地土豪の屋敷地が推定されたことは重要であり、有意義な調査であった。



第3図 小山田氏屋敷地推定図（薄い網部分が推定土塁 1/1,000）



土塁近景



西側土塁断面



東側土塁断面

## 2. 石之坪遺跡

所在地 蕨崎市円野町上円井

調査原因 円野地区園場整備に伴う事前調査

調査期間 平成10年5月30日～12月10日

調査面積 4,000m<sup>2</sup>（約20,000m<sup>2</sup>）

調査主体 蕨崎市教育委員会

担当者 関間俊明・秋山圭子



### 遺跡の概要

石之坪遺跡は、山梨県蕨崎市円野町上円井に所在し、北に八ヶ岳、南に富士山、西に南アルプス、東に釜無川・七里岩を望むことのできる、標高450m前後の台地の張り出したいわゆる舌状台地上に存在している。

本年度は、園場整備事業の計画変更により国道を挟んで東側の調査範囲を帝京大学山梨文化財研究所に委託し、蕨崎市教育委員会では昨年度に引き続き西側の約4,000m<sup>2</sup>を対象に調査を行った。本年度の調査範囲は舌状台地上の先端から中心にかけてで、遺跡の中心部分にメスを入れる形になった。豊穴住居跡や土坑等の重なりは非常に多く、豊穴住居跡が約8軒重なって確認されるなど、予想以上の遺構・遺物が地中下に眠っていたことを確認した。その眠っていたもののいくつかをトピック的に写真を中心に紹介していきたい。

写真①は石之坪遺跡の中でも特に中央に作られた縄文時代中期（勝坂式期）の150号豊穴住居跡である。写真是柱穴と炉跡のみを残した状態で、手前にも1軒住居跡があり、150号住よりも新しく作られたものである。床面に接して完形の深鉢形土器2点や多数の打製石斧などが出土した。写真②は150号住の炉跡の接写写真である。やや扁平な石を丸く囲ったものである。

写真③は144号豊穴住居跡としたもので、150号住よりも新しい（曾利式期）住居である。写真では柱穴を全部掘っていないが、掘り上げたところ5本柱であることを確認した。写真の上部の四角く石で囲ってあるのが炉跡であり、縦長の川原石を四角く並べ、角には細長い石を立石状にしていた。写真④は144号住の遺物出土状況の接写写真である。

写真⑤は遺跡内で台地の先端部（南）に作られた112号豊穴住居跡の炉跡内の遺物出土状況である。写真中央の把手のある無文の土器は吊手土器で、石之坪遺跡では現在のところ2例目である。

写真⑥は土坑の中から完形の土器が逆位で埋設されていた状況である。埋設土器は胴部が強くくびれ口縁部には複雑な文様の施された把手が4個つくいわゆる多喜窓タイプである。また、このほかに内側の赤彩された小形土器が出土した。恐らく顔料を入れていたものと考えられる。

写真⑦は土坑の底面に曾利式土器が横位で出土した状況である。土坑の壁際からは磨石・凹石などの石器が出土した。

写真⑧は底部を欠く土器を逆位に埋設したものである。

以上に紹介したものは石之坪遺跡の発掘調査の中で発見された遺構・遺物の一部である。現在のところ、発見した遺構・遺物の記録を中心に行っているが、来年度は報告書を作成していく予定である。（関間）

石之坪遺跡遺構配置図





①150号竪穴住居跡全景（南から）



②150号竪穴住居跡 炉跡（東から）



③144号竪穴住居跡全景（南から）



④144号竪穴住居跡遺物出土状況（北から）



⑤112号竪穴住居跡 炉跡内鉄手土器



⑥25L-SD1 土坑遺物出土状況



⑦18H-SD1 土坑遺物出土状況



⑧24J-SU1 埋葬出土状況

### 3. 上横屋遺跡

所在地 茅崎市藤井町北下条字上横屋506-1外

調査原因 民間開発

調査期間 1998年9月21日～1999年1月14日

調査面積 約900m<sup>2</sup>

調査主体 茅崎市教育委員会・茅崎市遺跡調査会

担当者 間間俊明 秋山圭子



#### 遺跡の概要

上横屋遺跡は、塩川右岸の河岸段丘上に位置し、標高は約377mをはかる。国道141号線をはさんで向かいには、そう距離をおかず塩川の流れがあり、広大な段丘の河川寄りの場所に立地する。通称藤井平と呼ばれるこの段丘は、現在、広大な水田地帯となっている。この肥沃な土地では、古来より人々の生活が活発に営まれており、上横屋遺跡周辺だけでも、後田堂ノ前遺跡（弥生・古墳後期・奈良・平安時代）、後田第2遺跡、坂井堂ノ前遺跡（古墳時代後期）、三宮地遺跡（绳文晚期・平安時代）、火雨塚遺跡（古墳時代）など、古墳時代・平安時代を中心に遺跡が群在している。こうしたなか上横屋遺跡では、弥生時代～平安時代の堅穴住居跡30軒（弥生時代6軒、古墳時代後期18軒、奈良時代2軒、平安時代2軒、時期不明2軒）、掘立柱建物跡3棟、土坑、畝状造構、溝、溝状造構が検出された。

古墳時代後期の住居跡は、各々個性的なカマドを持ち、該期のカマドの多様性を伺うことができる。また、16号住居跡では、覆土中に2面にわたって礫が敷き詰められている。その間層は漆黒の粘質土層で、骨片が多く含まれていた。上下層の間での大きな時期差は見られず、住居廃絶後の2次利用の様子が想定される。また、22号住居跡からは須恵器の長頸壺が出土するなど、該期の一般的な遺跡のあり方とは異質な特徴をみせている。

またこの時期の遺物として青銅製耳環2点、腕輪1点が出土している。耳環は、1号住居跡（古墳時代後期）北東端の覆土上層から出土した。2点は大きさも重さも異なり、20cmほど離れて出土している。いずれも表面にわずかに金メッキが残っている。また腕輪は1号住居跡の南、B3グリッド1号土坑から出土した。青銅製のきわめて細い棒状の素材を面取りしてから作られている。これらの遺物は市内ではこれまでに出土例がなく、今回が初めての出土となる。

遺跡は、市内ではまだ発見例の少ない古墳時代後期の遺跡で、該期の遺物編年研究、遺跡領域研究の上で重要な遺跡となろう。（秋山）



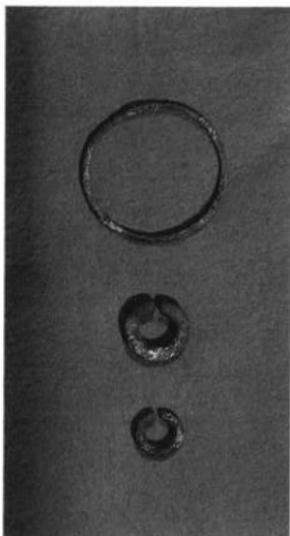
上横屋遺跡遺構配置図



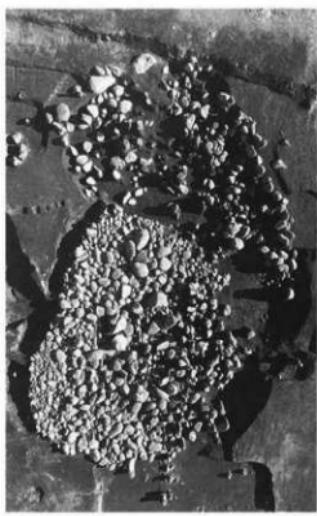
C 3 SD-1 轮轴出土状况



C 3 SD-1



耳圈·轮毂



14号・16号住居跡（第二断面）



B3 SD-1 著物7々7



14号・16号住居（第一断面）

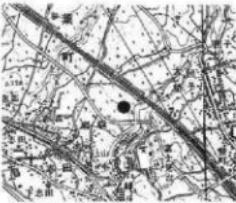


B3 SD-1 著物出土状況

## 4. 光照寺跡

所在 地 反葉町岩森字東堀

平成7年度に実施した反葉町内遺跡分布調査の際に通称「薬師山」の山林で土塁や石塁とみられる遺構が確認された。それまでの遺跡分布調



査や城館跡の調査では確認されていなかった。東から東南にかけては坊沢川によって浸食された急峻な地形であるが、北から西にかけては薬師山といつても丘陵上にわずかに15~20m起伏した程度の山である。南は茅ヶ岳広域農道、北は中央自動車道がそれぞれ東西に通っており、標高は一番高いところで377m、一応確認できる範囲は東西約100m、南北約200mである。南側は直線的な約30mの石塁と(図中①)、虎口を思わせるような石塁が(図中②)、また東にも比較的長い石塁と入口と思われる跡が確認できる(図中③)。さらに中央部には井戸の跡と思われる石組があり(図中④)、土塁も確認できる。その他に僅かな土盛りが確認できるが、地境の土盛りと思われる。今のところ遺物は確認されていない。

光照寺については、「光照寺薬師堂縁起」に詳しく書かれているというが、その所在は不明となってしまっている。これによると真言宗の寺院(後に改宗して曹洞宗となった)で、初めは現在地から北東の团子新居村にあったとされ、永正7年(1510)に武田信虎によって岩森村坊沢に移され、武田氏の保護を受け「百軒の坊中」といわれたほど多くの宿坊が建立されたといわれている。しかし天正10年(1582)3月、武田氏滅亡の際に織田軍によって寺全体を焼き討ちされたが、薬師堂は焼失を免れた。その後江戸時代初めに岩森村山本に寺は再興され、その時に薬師堂も移築されたという。かつての薬師堂をはじめ寺の主要部があったところを「薬師山」と、宿坊が点在していたところを「坊沢」というようになったという(坊沢一帯は現在でも光照寺名義の土地が点在している)。また薬師堂に安置されている薬師如来像の台座に書かれている記述によると、寛文5年(1665)に住職の天開春曉は薬師堂を拝殿に改修し、同時に厨子も修復したとある。

焼き討ちから200年以上経た文化10年(1813)に編纂された『甲斐国志』には「曹洞宗宇津谷村金剛寺ノ末除地二畝廿歩境内ニ薬師堂アリ拝殿二間三間飛驃工匠本州ニテ様造リノ最初ト云ヒ伝フ本尊春日ノ作」という記述のみで、かつての寺の繁栄ぶりを示す記述や薬師山・坊沢川の由来についての記述はなく、編纂の段階で漏れてしまったのか、既に当時の多くの人々の記憶から忘却去られてしまっていたと考えられる。

薬師山の発掘調査は行われておらず、坊沢一帯も宅地化され、文献もないに等しいほどの現状では詳細について知ることは困難であり、「光照寺跡」と断定することはできない。しかし、上記のことから周知の遺跡の一つとして遺跡名を「光照寺跡」としている。



## 5. 深山田遺跡

所在地 明野村小笠原字深山田

調査原因 県営圃場整備事業

調査期間 1998年7月6日～12月17日

調査面積 16,000m<sup>2</sup>

担当者 佐野隆



### 遺跡の立地と経歴

蓮崎市藤井平を国道141号線に沿って北進すると、右手に茅ヶ岳の山麓が塩川に浸食されてできた断崖が乳白色の岩肌をあらわにしている。断崖は高さが50mにもおよび、藤井平と茅ヶ岳山麓との行き来を阻んでいる。やがて断崖は明野村小笠原集落あたりで低くなる。このあたりは五反田川が山麓を浸食したため、断崖が削られて、山麓への回廊となっている。国道を右折し三村橋で塩川を渡ると明野村小笠原集落の北端に至る。

深山田遺跡は、小笠原集落の北端に位置する。明治26年の分査図には、遺跡を南北に貫いて古道「總坂路」の分流「小尾街道」が走る。現在は水田となったが、かつては甲州と信州東部とを結ぶ主要街道であった。おそらく街道の起源は中世初頭かそれ以前にさかのぼるであろうことは、今回の深山田遺跡での調査成果からうかがうことができる。遺跡付近から「じょうかん坂」と呼ばれる小道が塩川へと下り、蓮崎市中条の「御牧神社」へと至る。明治末年頃までは、小笠原に入ってくる一般人の通行を許さなかった坂であるとも伝えられ、後院牧「保坂牧」に由来する古道であるとの説もある。

「總坂牧」は10世紀以降、「小笠原牧」と呼ばれることもあった。一節には小笠原長清が私領化したともいわれているが、眞偽は定かではない。『吾妻鏡』によると、建暦元年(1211)は小笠原牧の牧士と鎌倉御家人三浦義村の代官とのあいだで争いが生じ、代官が解任されるという事件が起きている。当時の有力御家人どおしであった小笠原長清と三浦義村とのあいだに争いが生じたと考えるのは不自然であり、公家方と御家人方のあいだに多発した所領争いであったと解するほうが自然であろう。そう解釈すると少なくとも13世紀前半までは、小笠原牧は小笠原氏の所領ではなかったことになる。

遺跡の東側に真言宗「福性院」、曹洞宗「長清寺」の2寺がある。いずれの寺も小笠原長清にゆかりがあると寺伝に伝えられる。寺伝によると「福性院」は、貞觀年間(9世紀)に創立、14世紀に信濃守護小笠原大膳太夫政康により中興され、天正2年(1574)に現在の地小笠原字御堂坂下に移動したという。「長清寺」は、寺伝に慶長5年創立とあるが、過去帳に「応保二年三月五日生、仁治三年七月十五日逝ス歳八十一、法名淨普榮會……洛東ニ建長清寺又此ニ建ツト云々……」と記され、「当山開基長清寺殿懇翁榮會大禪定門」の位牌と長清の墓とされる五輪塔を有する。

小笠原地区は古代、中世から茅ヶ岳山麓への玄関口のひとつであったらしい。今回の発掘調査では、奈良時代(8世紀)の竪穴住居跡が1軒だけだが発見されている。山麓が塩川に浸食され、また造田で遺跡が削平されていることを勘案すると、奈良時代の集落が存在したことと推測される。8世紀代の集落は茅ヶ岳山麓初の発見であり、藤井平に隣接した玄関口としての地域性を示しているといえよう。

この竪穴住居は、特殊な構造を有する。住居の角から角へと対角線上に平らな石が敷かれていた。石は床面と同じ高さになるように、やや埋め込まれており、外見は暗渠のようである。石は住居内にのみ敷かれ、

住居北西隅から住居外へと溝が続いている。傾斜地を造成した折にわき出す地下水を住居外に排水する施設のように思われるが、類例もなく定かではない。

平安時代では竪穴住居跡4軒が発見されている。

遺跡の主体は、13世紀から15世紀の掘立柱建物群である。掘立柱建物の柱穴と思われるビットが約4,000基検出されている。柱穴が多くて掘立柱建物の組み合わせはにわかに判断しがたいが、3つの群にまとまっているようにみえる。柱穴群の一部を方形に区画するような溝も検出され、時期ごとに変遷しながらの一一定の規則性をもって掘立柱建物が建築されていたことが推測される。

こうした柱穴群中より密教法具と思われる銅製鏡14面が出土している。重機による表土剥ぎ作業中に発見されたため、詳細な出土状況は分からなくなってしまったのが残念である。銅製鏡の発見により、建物群は寺院の可能性も示唆される。

そうした建物群の性格を表付けるかのように、遺跡からは集石墓2基、火葬墓（火葬施設）4基、土坑墓5基が発見されている。火葬墓2基は時期不明だが、ほかは15世紀代の墓と考えられる。集石墓は、方形に石を無造作に積み重ね、一部に石列、環状石列がみられる。集石中には石材として転用された五輪塔も混じる。集石下部からは方形の浅い土坑が1基検出され、逆さにした火葬が埋納されていたほか遺物は出土していない。人骨は検出されていないが、墓と推測している。集石中より出土した内耳鏡から15世紀後半から16世紀頃と考えている。

土坑墓は5基検出され、うち3基は浅く小さな横円形の掘り込みをもち、頭骨のみが土葬されていた。頭骨は西面横位で漆を塗った箱に納められていたようである。占鏡が4~6枚埋葬されていた。この3基の墓は5mの間隔を置いて並んで検出されている。

別の上坑墓からは石鉢が出土している。一辺1mの隅丸方形の上坑には、大小の礫が詰め込まれ、石をもって埋めているかのようである。石鉢は上坑の東端から検出された。人骨は検出されていないが、遺体を西に向けて座葬し、頭部に鍋破りならぬ石鉢を被らせたのではと推測している。

火葬墓4基のうち、2基は石を敷きつめた火葬施設で、人骨が出土している。火葬施設をそのまま墓にしている可能性もある。ほかの2基は火葬骨片が焼土、炭とともに散布しているだけである。現在、長清寺にある小笠原長清の墓とされる五輪塔のうちの1基は、現在の遺跡内にあったものを昭和10年代に長清寺に移したという。当時を記憶する方からの聞き取りでは、五輪塔は火葬骨片の散布が検出された地点付近にあつたらしい。今後、五輪塔の形式からみた年代観とともに検討を加えたい。

遺跡からは、ほかに樋列2列、溝8条、竪穴状遺構1基、戦国時代末から近世初頭の石垣4列が発見されている。石垣は大小の自然石を布積み状に積み、隅角部は算木積み状に見える。高さは1.7mではば垂直に積み上げられている。一部にアカマツの調木もみられる。石垣は最低2回積み足されている。その積み方の特徴から、戦国時代末から近世前半頃のものと考えられる。

遺物は、奈良平安の土師器、須恵器のほか、中国陶磁（青磁合子片、梅瓶片、枕皿頭、青白磁など）、高麗青磁片、瀬戸・美濃、常滑、渥美などの国産陶磁、京都系土師器皿模倣品、在地産土師質土器、内耳鍋、瓦質土器、漆塗木製椀、石像物（五輪塔、石鉢、硯、砥石）、錢貨、木製陽物、各種木製品、加工木をもつ柱根などが出土している。15世紀の陶磁器などには熱を受け変色したものが散見される。遺跡の一角からは炭と廃土が散布していたことから、火災があった可能性がある。

以上の発見から、深山田遺跡は、13世紀中頃に寺院かそれに類する施設として造営が始まり、複数の建物が建築され建て替えられながら、15世紀中頃に火災により廃絶したと推測される。15世紀代には、寺域に墓



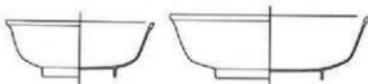
長清寺に検出された石垣



石跡が出土した土坑墓



火葬施設



銅製椀



深山田遺跡全体図

も設けられた。多数の建物跡が想定されることから、寺院のみでなく、宿坊などの付属施設あるいは一般住居なども存在した可能性もある。約150年ほどのあいだを置いて、16世紀末から17世紀初頭にかけて新たに寺院が造営されたと考えられる。

遺跡は13世紀中頃から17世紀初頭にかけて、基本的には寺院として存続したものと思われるが、400年に亘るその性格が変遷したと考えられる。

中世寺院の類型化とその変遷を検討した笠生1997に即して深山田遺跡を検討すると、深山田遺跡の寺院は、特定氏族が寺として、あるいは壇越（バトロン）になって建立した寺で、13世紀中頃に建立されたと考えられることから、鎌倉御家人あるいは北条氏関連の氏寺、あるいは彼らが壇越となった寺と考えられる。高麗青磁、中国産青磁などの高級貿易陶磁の大半は、13世紀代のものであり、寺院の背景に豊かな財力を備えた有力者が想定されることも、こうした見方を支持する。深山田遺跡に関与した人物を特定するに足る史料は得られていないが、あるいは小笠原長清以下の小笠原家もそうした可能性のある人物の一人といえようか。

15世紀代には土豪、在地土層農民が寺院の壇越として関与するようになるという。15世紀になって深山田遺跡内に複数の墓が設けられるのは、こうした背景があったと考えられる。

中世寺院は、15世紀後半以後急速に衰退、変貌するといわれる。深山田遺跡でも15世紀に廃絶したのち、再建された様子はなく、戦国末期から近世初頭になってふたたび寺院が創建されるまでの間は目立った遺構もみられない。

調査区東端の石垣は、隣接する曹洞宗長清寺の所有地で発見されている。寺伝その他の古文書によると長清寺の前身は、長昌庵ないし長昌寺と名乗り、天正から宝永年間にかけて寺の築造を繰り返したことが分かる。寺は明和年間に現在地に移築し、古寺跡は水田化された。その一連の記録から、石垣が長清寺の前身の坊、寺を建てるために築かれた可能性が高いと思われる。

このように深山田遺跡は、中世寺院の変遷と近世寺院の登場を今に伝えている。寺院の背景には、それを信仰面から支えた聖職者、経済面から支えた有力者の存在がある。今後の検討ではそうした背景を探り、茅ヶ岳山麓の中世史像を具体的に解明していきたい。

石垣は長清寺塹家、施工区の協力により現地での保存が決まった。近日中に村史跡に指定する予定である。

#### 参考文献

- 笠生 衛 1997 「考古学からみた中世寺院—中世寺院遺跡の分類と変遷を中心にして」『研究報告』第8集 帝京大学  
山梨文化財研究所



深山田遺跡全景



奈良時代の竪穴住居

## 6. 東向長坂遺跡（第2次）

所在地 須玉町東向

調査原因 県営園場整備事業

調査期間 1998年4月～12月

調査主体 須玉町教育委員会

担当者 山路恭之助、深沢裕二

### 調査の経過

今回の調査は、1997年8月に発掘調査した長坂遺跡地域から更に南西へ続く塩川右岸の河岸段丘上に立地する。中尾城の直下にあたり地中レーダー探査では、溝状の反応が遺跡中央にみられ城館跡関連の遺構が予測された。平成9年12月3日から3日間に実施した試掘調査では、遺構の発見には至らなかったが、縄文時代中期後葉から後期中葉にかけての土器片、特に後期の粗製土器や薄手土器片が多量に出土したのが目立った。平安時代から中世に伴う遺物は前者に較べて極めて少なかった。

1号住居(復) 利府区南東部から検出された遺構で、当初は隅丸方形の堅穴住居と思われたが、カマドなどの附属設備を伴わない遺構で性格に関しては再検討する必要がある。平面プランは長軸2.65m、短軸2.6mを測る隅丸方形を呈し、壁高は55cmが測られ外反する。遺物は2層の黒褐色土から2片のみで、共に深鉢片で一つは無文の茶褐色の小片、一つは薄手土器の小片である。

2号住居 1号住居に接して検出された遺構で、平面プランは長軸3.7m、短軸2.95mを測る隅丸方形を呈し、壁高は20cm前後が測られる。北壁の内寄りの床面に、長軸110cm、短軸90cmの範囲に焼土が認められ、周囲には袖石と思われる9ヶの礫と粘土塊が検出され、崩落した粘土カマドと推察する。北壁の東隣には、長軸77cm、短軸72cm、床面から33cmの深さの土壙が認められた。遺物は、胎土が粗く、色調が茶褐色の深鉢の破片と、色調が淡黄褐色の薄手土器の小片が出土している。

3号住居 1、2号住居に接して検出された遺構で、平面プランは、長軸3m、短軸2.8mの隅丸方形を呈し、壁高は約18cmを測る。床面のはば3分の2に、河原石の礫であった。カマドは消滅したものと思われる。出土遺物は、覆土中から細沈線文の薄手土器片や、石英が混入する深鉢調部片の他、上器の口縁部小片が出土している。

4号住居 利府区南東部の南端から検出された遺構で、平面プランは、長軸3.8m、短軸3.5mが測られ、隅丸方形を呈する。壁高は15cmから20cmが測られる。南壁のはば中央に認められたカマドは完全に破壊されていたが、右袖石1ヶと支脚が遺存していた。覆土上層から炭化物をふくむ焼土粒が認められ、床面全面から炭化材が出土した焼失住居であった。遺物には、甲斐型土器器杯、カメロ練の他、高古付杯が出土している。杯は花弁状暗文を施したもののが殆どで、口縁部と底部が遺存する杯の2例から、底径/口径比が50から60%を超える、従量的に口径×底径×2の範囲で捉えられる。

5号住居 同じく南東部から検出された遺構で、4号住居の西隣に位置する。平面プランは、長軸3.9m、短軸3.45mで隅丸方形を呈する。壁高は東壁で最大22cmを測り、西壁で8cmと低い。本跡が火災をうけていて、床面全体に炭化粒子に覆われ、柱状の炭化材が出土している。カマドは南壁の中央に位置していたと思われるが、天井石、袖石等は完全に消滅していて、民軸1m、短軸95cmの範囲の焼土が8cmの厚さに認めら

れた。遺物は、床面上から土器器口縁の細片と、内外面にヘラ削りした暗褐色のカメ片がある。

6号住居 調査区のほぼ中央から検出された遺構で、遺構の南壁全部と東壁、西壁の一部を炭焼き遺構によって切られている。遺存する北壁は4m、東壁2.7m、西壁2.6mが測られる。平面プランは隅丸方形を呈し、規模は推定で長軸4.1m、短軸4mと思われる。住居に伴うカマド、柱穴、周溝は認められなかった。炭焼き遺構によってカマドは消滅したものと思われる。遺物は少なく胎土が粗い薄手の土器片と褐色の内耳片が複数から出土す。

7号住居(仮) 調査区中央よりやや西寄りで精査中、東西5m、南北7.5mの範囲から多量の縄文時代後期中葉の土器片が出土したところから10mメッシュのグリットを2.5mメッシュに細分化して掘り下げたが遺構を検出することができなかった。

8号住居 6号住居から南へ約40m距てた位置で検出された遺構で、平面プランは長軸6.7m短軸5.9mの隅丸方形を呈し、壁高は南西壁で最大32cmを測る。本跡の特色は粘質の灰褐色土と扁平な袖石とで構成されたカマドが2基並列して遺存しており、1基は被熱痕も覗き、袖石と焼上が鮮やかな燃焼部が残存するのに対し、1基は両袖石の間に燃焼部を塞ぐように石が立ち燃焼部の内外に使用した跡は見当たらない。遺物は、糸切り痕がある土器杯の底部片や甲変型のカメ片などが出土している。

9号住居 8号住居の北内隅の一部を切って構築された住居で、平面プランは長軸1.2m、短軸80cmで隅丸方形を呈する。壁高は西壁で最高17cmが測られる。カマドなどの内部施設は認められず、周溝もなく、2ヶのピットが穿かれているにすぎない。遺物は、内側に煤が付着した羽笠片、カメの小片などが出土している。

10、11、12、13号住居 これらの住居は調査区の南西部の低河岸段丘にあって、この一帯が2m以上の盛土となるため、遺構の平面形を記録、十字のトレンチを設けて、覆土の状況、カマドの位置、遺存する遺物の収集と撮影することにとどめた。遺物は甲変型カメ片、羽笠片等が12、13号住居から検出できた。

14号住居 調査区北東部から検出された遺構で、平面プランは、4.4m方形の規模をもつ隅丸方形である。壁高は北東壁で最大21cmが測られる。周溝は東壁と北壁下に巡る。カマドは、東壁の中央にあって、規模は70cm×110cmが測られ、両袖石と支脚の他、数個の平石と焚口部前に天井石が崩落している。遺物は、墨書き器、杯の蓋、甲変型カメ片、須恵器口縁部片、鉄さい2ヶがある。

15号住居 調査区の北東部の端で検出された。平面プランは、長軸4.1m、短軸3.8mで隅丸方形を呈する。壁高は東壁で最高29cmが測られ、火災を受けた住居跡である。カマドは南東コーナーに設けられ、左袖石は抜かれていって、天井石もない。遺物は、土器器蓋、須恵器底部、甲変型カメ片と鉄さい1ヶなどがある。

#### その他の遺構と遺物

(1) 土壙群 1号住居の周辺から12基

(2) 炭焼き遺構 4基

(3) 上器集中地区が調査区北西隅

(4) 遺物 14号住居から20m東の炭焼き遺構傍から三角柱土製品が、調査区中央北寄りの地点で右冠が出た。前者は川又南遺跡に次いで町内では2ヶ目、後者は本町で初めての出土である。

今回の調査で検出された遺構は、期待された中尾城に伴う遺構は確認されず、レーダーで確認された済状の反応は自然の小川であった。住居は平安時代が主で、特に焼失住居が多かった。縄文時代の住居跡は検出されなかったが、遺物は、中期末の曾利期の深鉢片がまとめて出土したり、後期初頭から中葉の土器が多く出土したのが当遺跡の特色である。



第2次発掘調査区



8号住居跡カマド



石冠出土状況

## 7. 伝仁王屋敷遺跡

所在地 高根町清里字念場原3461

調査原因 民間事業

調査期間 昭和63年12月1日～12月30日

調査面積 14m<sup>2</sup>

調査主体 高根町教育委員会

担当者 雨宮正樹



当遺跡は、八ヶ岳南麓の標高約1,020mを測る高原に位置し、南北に延びる尾根状の台地の南に面する傾斜地に立地する。東西約50m離れたところを現在の国道141号線（佐久甲州街道）が南北に縦貫している。

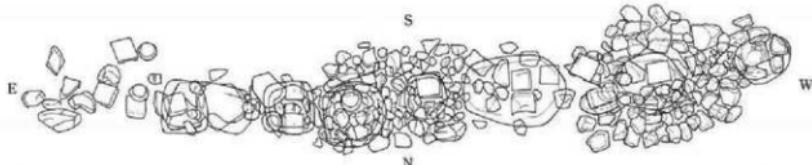
この道は、長沢の宿を通りぬけ、川俣川に架かる月の木橋を渡り弘法坂を登り上がるルートになっているが、旧道は現在の清里湖（大門ダムによる人造湖）の北側の縁をめぐり、風の丘公園付近で現道と交わり、当遺跡の東から西の直近をとおり、平沢を経由して佐久・小諸方面へ向かっていたと思われる。この付近は、念場原といわれ、『甲斐国志』によると中世に清次という人物が開発を行ったが気象条件の悪化によってこの地域を放棄したと記している。

この遺跡が発見された経緯は、地元の酪農家による山林の開墾事業が計画され、これに伴い清里郷土研究会が、この山林一帯は、『甲斐国志』の海岸寺の項によると「昔は八ヶ岳の麓念場原にあり」と記述され、地元の伝承でもこの地が海岸寺の旧地と伝えていることから、昭和63年5月に分布調査を行い、発見されたものである。

のことにより、当教育委員会では国および県からの補助をえて、昭和63年12月に遺跡詳細分布調査として調査を行い、南北朝期から15世紀前半に位置付けられる五輪塔が確認された。検出された五輪塔群は、東西7m、南北2mの範囲内に、拳大から人頭大の川原石によって一辺0.5mから1.5mの方形の基壇が7基あり、基壇の上に並んで建てられていたものが経年変化により倒壊し、現状で復元可能な五輪塔が2基、各部材として散乱しているが組み合わせできる五輪塔が10基分検出された。

なお、検出された基壇下部の調査を行ったが、小ピットのみの確認だけで、時代を特定できる遺物は出土していない。

発見された五輪塔群が、海岸寺に伴うものかの正否は明らかではないが、この発見によって15世紀前半には庵かお寺があったことが伺うことができる貴重な資料である。



伝仁王屋敷遺跡五輪塔群出土状況図

## 8. 丘の公園入口遺跡

所在地 高根町清里念場原3545-697  
調査原因 町道下念場朝日丘線拡幅工事  
調査期間 平成10年8月19日～8月25日  
調査面積 300m<sup>2</sup>  
調査主体 高根町教育委員会  
担当者 雨宮正樹



当遺跡は、八ヶ岳南麓の標高約1,180mを測る高原に位置し、南北に延びる尾根状の台地上にはいたる所に流山状の小山が分布している。この流山の発達した南に面する傾斜地に遺跡は所在した。

この付近一帯には小規模な遺跡が点在している。特に丘の公園地内には4カ所が公園造成に先立つ試掘調査により確認され、2カ所が発掘調査を行っている。近年では清里有料道路に伴う発掘調査が行われ、旧石器時代及び中世の落とし穴が検出されている。

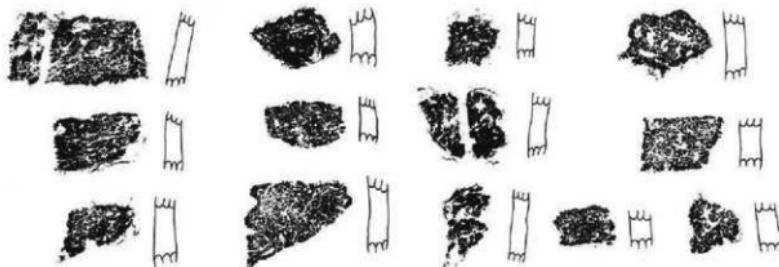
この遺跡が所在する尾根状の台地には、縄文時代早・前・中・後期、弥生時代後期、古墳時代後期、中世、近世など複数の時代の土器が出土している。

調査区域は、既存道路の拡幅部分のみであるため非常に細長く、試掘調査の段階ではこの区画の中のほぼ真中より遺物を確認することができた。

現状では当地域は牧草地として利用されており、現況の地形としては、比高差約6mを測る小山が西に連なり防風林帯、通称「風きり」と呼ばれ、東は現況の道路により斜面が遮断されてはいるが、比高差約5mを測る切り通しとなっており、拡幅される場合一帯はテラス状に張り出した所といえる。

この面の表土を重機により構造および遺物を確認しながら除去を行ったが、施工上の関係から堆土を予定工区内で処理するにあたり、4回の堆土移動を行わなければならなかった。その結果用地内のほぼ真中に隠れ沢が存在し、人頭大以上の疊が混入している状況が検出された。

出土している土器は、小破片化し、耕作等により摩滅を受けているため図示できるものは下図のとおりであるが、縄文時代早期の様相を呈するものと思われる。



丘の公園入口遺跡出土土器実測図

## 9. 龍角西遺跡

所在地 長坂町長坂下条

調査原因 県営広域営農団地農道整備事業

調査期間 1998年5月13日～1999年3月11日

調査面積 約1,800m<sup>2</sup>

調査主体 長坂町教育委員会

担当者 村松佳幸



龍角西遺跡は日野春小学校から北へ約300mの地点、宮川右岸の台地周辺に位置している。発掘調査は1997年度から開始しており、今年度は第2次調査にあたる。昨年度の調査は台地上で実施し、古墳時代の竪穴住居跡10軒、平安時代の竪穴住居跡5軒、掘立柱建物跡3棟などが発見された。遺物も、古墳時代の土器が住居跡からある程度まとめて出土して、資料が少なかった該期の八ヶ岳南麓の様子を解明する貴重な遺跡となった。

今年度は昨年度の調査区の南西にあたる谷部と、県道茅野・小淵沢・蘿崎線（七里岩ライン）の通る低い台地の東端を調査した。標高は約654～660mである。

発見された遺構は平安時代の竪穴住居跡2軒、中世のものと思われる建物跡2軒、掘立柱建物跡3棟、竪穴状造構2基、溝11条、土坑約70基、ピット約150基、石列2列、組石造構2基、井戸1基等である。その他に地震の痕跡が1か所確認された。平安時代の竪穴住居跡は昨年度に続き2軒発見され、谷を挟んで西側にも集落があることが確認できた。

中世のものと思われる建物跡（写真2～4）は2基発見され、1つは約4m×4m、もう1つは約2m×2mと大きさがかなり違うが、方形に地面を掘り下げ4隅に柱穴を持っている点で共通している。覆土中からは土器片数点と5～30cm大の礫が数十点出土するだけで、あまり遺物は出土していない。住居・倉庫・緊急避難小屋・防寒小屋などの諸説があるが、何に使われていたものかは不明である。県内では、長坂インターチェンジ周辺の小和田遺跡・小和田北遺跡・小屋敷遺跡・石原田北遺跡・金生遺跡で確認されていて、現在のところ北巨摩地域に多く発見されている。

遺物は、縄文時代の土器・石器、弥生時代の磨製石鎌・古墳時代の土師器、平安時代の土師器・須恵器、中世の陶器・古鏡、近～現代の陶磁器・ビン・缶などが出土している。

また、遺構ではないが、地震の痕跡が調査区中央から発見されている（写真5）。これは地震による液状化現象が調査区内の土層断面で確認されたもので、土層中の黒褐色土が液状化し、その上の黄褐色土層を分断している。その土層を観察した試掘溝の反対側の壁の土層では、黄褐色土層の下の黒褐色土層のそのまた下の白褐色土までが噴き出していた。地震発生の時期は、液状化層が縄文時代の遺物を含む黄褐色土層を分断し、平安時代以降の遺物を含む暗褐色土に覆われているので、縄文時代以降・平安時代以前と考えられる。山梨県内では、中巨摩郡甲西町の大師東丹保遺跡・油田遺跡などで確認されているが数は少なく、古代の災害を知る貴重な資料である。

このように、龍角西遺跡は縄文時代から近～現代まで様々な時代の生活の跡があり、この地域の歴史を知る上で欠くことのできない遺跡である。



写真1 第2次調査区全景（西半分）



写真2 中世の建物跡（南から）

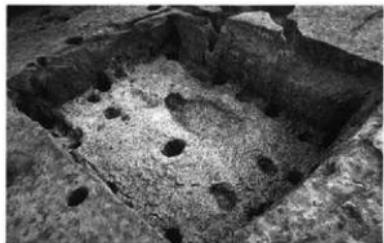


写真3 中世の建物跡（北東から）

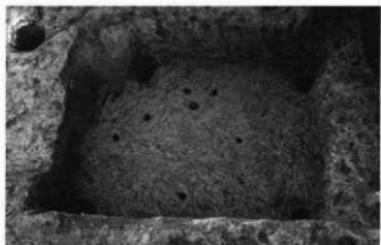


写真4 第1号竪穴道構



写真5 地震痕跡

## 10. 紺屋遺跡

所在地 長坂町長坂下条

調査原因 県営広域営農団地農道整備事業

調査期間 1998年12月9日～1999年3月11日

調査面積 約300m<sup>2</sup>

調査主体 長坂町教育委員会

担当者 村松佳幸



紺屋遺跡は日野春小学校から北へ約300m離れたところの、県道茅野・小淵沢・韭崎線（七里岩ライン）の通る台地上に位置する。県道を境にしてすぐ東側に龍角西遺跡があるが、龍角西遺跡は谷を挟んだ2つの台地上に立地し、西側の台地は紺屋遺跡のある台地の東端にあたるため、同じ遺跡と考えられる。今年度は調査対象範囲の西端約300mを調査し、残りの部分は来年度に調査が予定されている。標高は約660～662mである。

今回の調査では縄文時代の竪穴住居跡2軒、平安時代の竪穴住居跡3軒、時期不明の竪穴状造構1基、五輪塔の集中地点2か所、五輪塔の散在地点1か所、墓とを考えられる土坑9基、火葬施設あるいは火葬墓と思われる土坑2基、その他の土坑22基、ピット8基、溝1条が発見された。縄文時代の竪穴住居跡は中期中葉に属し、直径約6mである。平安時代の住居跡は10世紀のもので、どれも東壁に竈を作っている。

五輪塔の集中地点、五輪塔の散在地点、墓とを考えられる土坑は調査区の西端から発見されている。1号五輪塔集中地点（写真1）はきちんと並べられている様子があり、五輪塔がくずれた後にひとまとめにされた感じである。2号五輪塔集中地点（写真2）も少し並べられた様子があり、その上に灰陶陶器の小皿がお供えされていたかのように乗せられていた。両者ともその真下に墓坑はなく、少しづれたところに墓坑がある。墓坑の上に五輪塔をまとめて置く事例もあるが、本遺跡ではそれとは違い、墓坑を意識せずに五輪塔をまとめたようである。また、18号土坑からは人骨とともにかわらけが2点出土している。時期はかわらけや五輪塔の形態から15～16世紀と考えられる。

県道を挟み本遺跡のすぐ東の龍角西遺跡から15～16世紀と考えられる掘立柱建物跡や竪穴の建物跡が見つかっており、両遺跡は中世集落の居住域と墓域の在り方が検討できる好資料と言えよう。



写真1 第1号五輪塔集中地点



写真2 第2号五輪塔集中地点

## 11. 高松遺跡

所在地 長坂町長坂上条

調査原因 農道整備事業

調査期間 1998年4月16日～6月5日

調査面積 約100m<sup>2</sup>

調査主体 長坂町教育委員会

担当者 小宮山隆・山下大輔



高松遺跡はJR長坂駅から北へ約700m離れた宮川右岸の台地上に位置する。その台地の標高770m前後の南北にのびる尾根上の南端に立地する。今回の調査は農道建設に先立って行われ、調査面積はおよそ100m<sup>2</sup>に過ぎなかった。しかし、縄文時代中期初頭から後葉にかけての竪穴住居跡8軒、土坑13基、溝状構造1本が発見された。

その中でも、特に目を引くのが第7号住居跡（中期後葉後半）にともなう大型炉址である。この炉は平面が1.7m×1.5m、深さが0.7mもあり、管見のかぎりでは県内最大級の大きさである（写真1）。炉の底部からは数点の礫に混じり石皿片が1点出土している。第7号住居跡の大きさは、全体を調査したのではなく一部だけなのではっきりとは分からぬが、土層断面の住居跡の壁の立上がりの観察からはおよそ8mであると思われ、他の住居跡と比較して大きいものである。

遺物は縄文時代前期後半から中期にかけての土器・石器が出土しているが、主体は中期中葉から後葉である。プラスチック箱（60cm×40cm×20cm）で27箱分出土したが、土製の匙やミニチュアの有孔土器等が出土した中で、縦8cm×横7cmという大きな中期中葉の土偶頭部が第2号住居跡から出土したことは特筆される。この大きさの頭部に対する胴部の大きさを推定すると、かなりの大きさの土偶になると思われる。

第2号土坑からは中期中葉末の4単位の大型把手をもつ深鉢が出土している（写真2）。この土坑は先述した第7号住居跡の南隅の下にあり、一部分が切られている。4単位の大型把手をもつ深鉢は対になる2つの大型把手が残っており、欠けていた2つの大型把手の内1つはその土器の下に置かれていたが、もう1つは発見されなかった。土坑内にはその土器以外に3個体の深鉢が一緒に埋められていた。

本遺跡は、質量ともにすぐれた典型的な八ヶ岳南麓の縄文中期集落遺跡であり、調査区以外にも尾根全体にわたって良好な遺構・遺物が存在するものと考えられる。



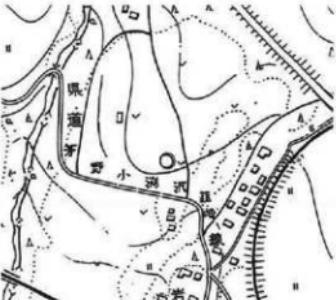
写真1 大型炉址（第7号住居跡）



写真2 4単位の大型把手をもつ深鉢（第2号土坑）

## 12. 上前後沢第2遺跡

所在地 小淵沢町字上前後沢4253-2  
調査原因 個人住宅建設  
調査期間 1998年7月1日～1998年7月13日  
調査面積 494.16m<sup>2</sup>  
調査主体 小淵沢町教育委員会  
担当者 佐藤勝広



立地と経過 上前後沢第2遺跡は、甲六川東側の標高940m付近に位置する。現在は白樺が植えられている。過去実施された調査の結果、縄文時代の土壙1基、おとし穴状遺構2基が確認されている。

調査の結果 住宅の建設に際し、掘削が予想される、建設部分について重機で表土剥ぎを実施し、調査を行った。その結果、弥生前期の単独埋甕を確認した。他遺物は、縄文中期の土器片、石器等が出土している。

## 13. 上八里田遺跡

所在地 小淵沢町字上八里田8041-1他  
調査原因 煙耕作  
調査期間 1998年7月31日～1998年8月17日  
調査面積 3m<sup>2</sup>  
調査主体 小淵沢町教育委員会  
担当者 佐藤勝広



立地と経過 上八里田遺跡は、標高820mを測る台地上に位置する。今回、土地所有者である進藤光雄氏から畑を耕作中に陥没し、大きな穴が開いたので調査をしてもらいたいとの、問い合わせがあり、調査に至った。調査の結果 調査は、陥没した穴の精査を中心に行った。その結果、穴は地下式土壙と判明し、土壙内から内耳土器片・かわらけ片・宝鏡印塔の九輪部・石臼片・石鉢が出土した。調査後、地下式土壙は保護されることになった。



上八里田遺跡調査風景



上前後沢第2遺跡調査風景

## 14. 史跡 谷戸城跡

所在地 大泉村谷戸字城山

調査原因 史跡整備に伴う遺構確認調査

調査期間 1998年7月27日～12月21日

調査面積 780.2m<sup>2</sup>

調査主体 大泉村教育委員会

担当者 伊藤公明・渡邊泰彦

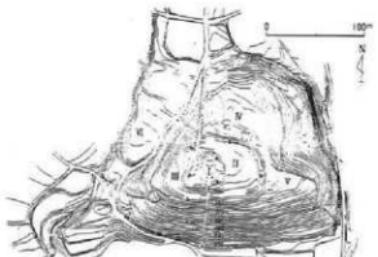


図1 郭配置図 (S = 1/5,000『御所遺跡発掘調査報告』より転載)

が確認された小和田館跡、堀内下絶守が城主と伝えられる県指定史跡深草館跡、地下式土塁が多く検出された金生遺跡など中世の遺構、遺物が多く確認されている地域である。

平成5年に「茶臼山と呼ばれる山頂に土塁・堀などの遺構が良好に残って」おり、「武田氏の発展過程を具体的に跡づけることができる重要な城跡である」との理由から史跡の指定を受け、現在に至っている。本年度は、史跡整備に伴って5ヶ年計画で進められる発掘調査の1年目に当たるが、これまでに6度の試掘調査（昭和56、平成1・4・7・8・9年度）が行われており、それぞれ成果をあげている。

調査方法は、公共系座標を基準とする100m四方の大グリッドを10m四方のグリッドに、さらにそのグリッドを5m四方に分割した後、その中に4m四方の調査トレンチを設定し、トレンチ間には幅1mのベルトを残した。このベルトは二の郭と五の郭の層序を通して見るためのもので、両郭のはば中央を通る東西のラインと二の郭の西端を南北に通るラインについては土層断面図を作製することとし、必要に応じてさらに幾つかのラインを設定した。

二の郭には36のトレンチを設定し、調査を行った。その結果、柱穴痕35、土坑8（1～8号土坑）、集石2（2～3号集石）、焼土跡2、土壘の内側を巡る空堀、ローム質土による地盤面を確認した。土坑と集石については、2号土坑と3号土坑以外は全て縄文時代の所産と考えられる。この郭は広範囲に渡って擾乱を受けしており、表土直下で確認できるはずの柱穴痕は30～40cm掘り下げなければ検出できなかった。これらの柱穴痕は最初に大きく掘ったあと、その穴の壁に沿って黒色土か黄褐色土を入れて整形し、残りの部分に粘性の強い土を非常に硬く締めた状態で入れている。削った表面の模様から、練って混ぜ合わせた土を根固めに使っていたと考えられる。柱穴痕は郭の中央付近に集中し、芯との距離は南北140～150cm、東西170～180cmを



史跡谷戸城跡は、最顶部の標高860m余、周囲との比高差約30mの独立丘を利用して築かれた城跡で、甲斐源氏の祖、逸見冠者黒源太清光の居城と伝えられている。その構造は主郭を中心に5つの郭を北、東、西の3方向に配したもので、急傾斜となっている南側には帯郭を数段設けている。また、城の西と東を流れる西衣川と東衣川は天然の堀としての機能を果たしている。谷戸城の周辺には対屋敷、町屋、御所といった地名が残るほか、12～13世紀の遺物が出土した城下遺跡、15～16世紀の遺物と地下式土塁

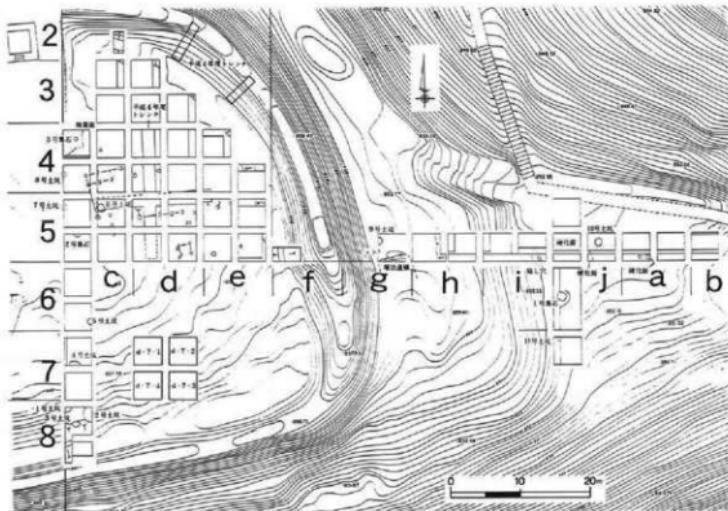


図2 史跡谷戸城跡 平成10年度調査区全体図 ( $S = 1/700$ )

測るものが多い。また、その配列から3~4棟の建物跡の存在が予想され、どれもが東西軸は東側が若干北へ振れている。これは、郭を囲う土塁のラインと平行になるようにしたためと考えられる。建て替えの可能性については、重複あるいは近接しているものがd-5-2, d-5-3で確認されているが、現時点では何とも言い難く、今後の南半の調査結果を待って検討したい。

空堀はc-8-4, f-5-4, e-4-3, e-5-2, c-2-3のトレーニングで検出し、二の郭を囲う土塁の内側に沿って掘り込まれていることが確認された。断面形からは薬研堀と考えられるが、c-8-4（南）→c-2-3（北）と巡って行くうちに上幅と底幅は広がる傾向にある。c-2-3に至っては逆台形のような断面形となり、土塁側の斜面は中位に段を設けて、底部に至る傾斜を急にしている。しかし、勾配についてはこのc-2-3土塁側を別として約40°と一定である。また、以前から指摘されているように、南に比べ東～北側の土塁が高くなっていることも改めて確認された。二の郭は擾乱を受け、土塁頂部は表土を除去していないため正確な値ではないが、二の郭の面から堀底までの深さはc-8-4で約200cm, f-5-4（東）・c-2-3で150~160cmとなっている。そして土塁頂部から堀底までの比高差は前者が約270cm、後者が380~390cmを測る。土塁の高くなっている範囲が、四の郭とそこから南へ延びる郭状の平坦面に接した範囲と重なり、南の急斜面に接するc-8-4では土塁の盛り土が低いことからも、その目的がこれらの郭に対する防御の強化にあったことが分かる。後世、空堀は半分ほど埋まった段階で地業の施されていることも分かった。その層はローム質土を主体とし、非常に硬く締まったもので、すべてのトレーニングから確認されていることから、この空堀を全周していると考えられる。通路として利用されたものだろうか。

五の郭には14のトレンチを設定し、調査を行った。その結果、土坑3（9～11号土坑）、集石1（1号集石）、焼土跡2、ピット1、陥落穴1、造成によるものと考えられる硬化面、空堀らしき跡を確認した。土坑と集石は9号土坑を除いて二の郭と同様に縄文時代のものと考えられる。なお、ここで言う「五の郭」とは前述の四の郭から南へ延びる郭状の平坦面を含む。

この五の郭では、昭和56年度に桜の植樹に先立って試掘調査が行われている。幅3m、長さ30～40mのトレンチを東西方向に4本設定して行われ、ピット1、柱穴痕を有する土坑1、内耳上器出土の土坑1、砥石出土の土坑1のほか、青磁片（龍泉窯系か）1点、礎石状の石2個と壠状遺構が確認された。今回の調査範囲とは部分的に重複し、壠状遺構をg-5-3で、礎石状の石2個をj-6-1において確認した。

g-5-3では西壁際の土塁基底部に近い部分から上坑（9号土坑）とピットが確認された。特にピットは径30cm、ローム面からの深さ40cmを測り、前回の調査で発見された径15～20cm、ローム面からの深さ40～50cmの同じく土塁基底部に近い部分のピットとの関連が注目される。

また、j-5-4とj-5-3の南西隅の部分において灰黄褐色上の硬化面（表土下20～25cm）を検出し、若干離れた位置になるがa-5-4の東壁に接した部分でもローム質の土を突き固めたような硬化面（厚さ4cm）を確認した。このトレンチの南側には前述の内耳上器を出土した土坑があるほか、周囲からもかわらけの破片が比較的まとまって出土している。これらのことから、郭として機能していたことは十分考えられる。

なお前回の調査で確認されていた礎石状の石については、出土レベルが1号集石の確認面に近く、右を置くために掘り込んだ形跡も認められないことから礎石ではないと判断した。

出土遺物は縄文時代のものが9割以上を占め、中世の遺物で図示できるものは図3～4に示したものではほぼ全てである。1～3はかわらけで、1はc-3-2、2はd-3-3、3はj-5-3より出土。4はc-7-1出土の甕底部か、外面に指頭圧痕が明瞭に残る。5はc-8-1出土の縁鉢小皿で、口縁部は灰釉。6はd-4-4出土の灰釉陶器皿、7はS56年度調査で出土の青磁盤か。小破片のため復元が困難で、口径は正確さを欠く。体部内外面に放射状に稜線があり、その間の器面は若干剥む。また、口縁部の端部は波状を呈する。8～10は内耳土器で、8はS56年度調査の土坑、9はc-8-4の空堀覆土中、10はd-3-1の壠上内より出土。11はS56年度調査の土坑より出土の礎石。12はc-7-1出土の銅製の仏像具。

今回の調査では、遺構に伴う遺物は確認されなかった。また、出土点数も少なく、遺存状態も悪いため、遺物から城の年代を特定するのは困難と言える。そこで、遺構より採取した炭化物の<sup>14</sup>C年代測定を行う予定であり、その結果については、また別の機会に報告したい。（文責 渡辺）

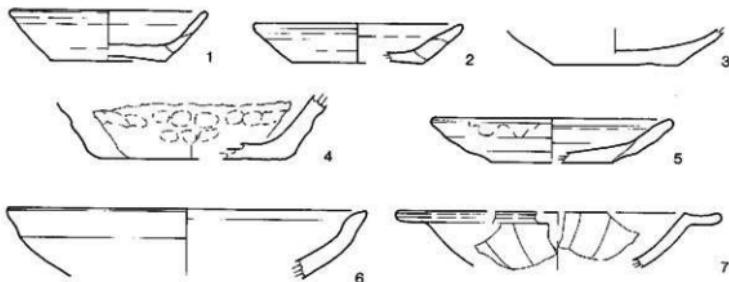


図3 出土遺物 (1～3・5・6-1/2、4-1/4、7-1/3)

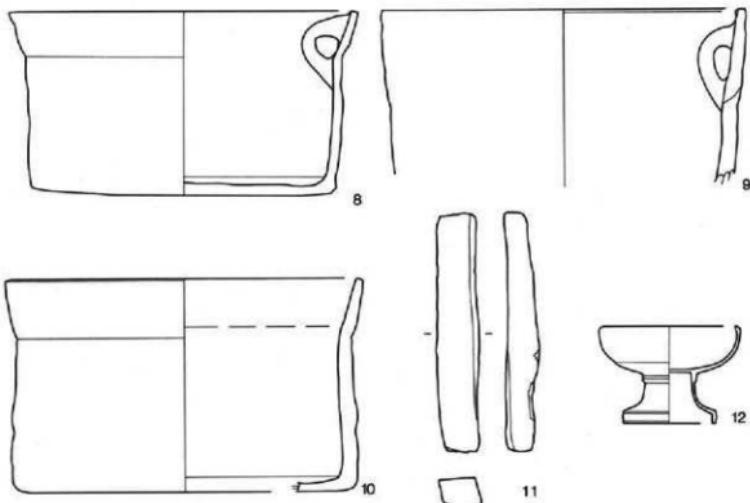


図4 出土遺物 (8~11-1/4、12-1/2)



写真1 調査区全景

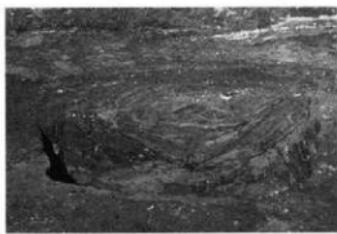


写真2 柱穴痕断面



写真3 c-8-4 空掘



写真4 f-5-4 空掘

## かみこよう 15. 上小用遺跡（第4次調査）

所在地 北巨摩郡白州町島原地内

調査原因 畑地帯総合整備事業

調査期間 1998年9月21日～3月3日

調査面積 1,011m<sup>2</sup>

調査主体 白州町教育委員会

担当者 杉本 充



本遺跡は、明石山脈の北部、甲斐駒ヶ岳の前山群を構成する巨摩山地東麓に位置し、1km程東を北西から南東に流れる釜無川が形成した河岸段丘高位面に立地している。この段丘面（以下島原平）の北側は流川に、南東側は松山沢川に削られ、急な段丘崖となっている。現況は、畑及び遊休桑園である。

島原平では一面に中世の遺物が散布しているが、段丘の南側には縄文時代中期の遺物が濃密に分布しているため古くから遺跡の存在が知られている。昭和63年度・平成元年度と平成9年度に遺跡範囲と遺構確認のため試掘調査が行われている。

本年度の調査においては、縄文時代中期の竪穴住居址22軒、平安時代の竪穴住居址3軒、土坑群、地下式坑等が検出された。遺物はコンテナ200箱程出土しているが、翡翠製垂飾・黒曜石製異形石器・ミニチュア有孔土器等が特筆される。

### 引用・参考文献

折井 敦 1989 「教来石民部館跡」白州町教育委員会

折井 敦 1990 「教来石民部館跡」(第2次)白州町教育委員会





調査区全景



1号住居址



16号住居址



12号住居址



ジョッキ形土器（9号住居址）



ミニチュア有孔土器（7号住居址）



翡翠製垂飾（6号住居址）



黒耀石製黃形石器（O-13-1区）

## くろさわ 16. 黒澤遺跡

所在地 武川村大字黒澤

調査原因 個人住宅建築に先立つ発掘調査

調査期間 1998年4月30日～1998年9月1日

調査面積 600m<sup>2</sup>

調査主体 武川村教育委員会

担当者 竹田眞人



本遺跡は、武川村黒沢地区に存在する。南の黒沢川と北の大武川に挟まれた台地上にあり、標高は約550mをはかる。調査地は以前に長芋などの耕作が行われており、遺構や遺物がかなり破壊されていた。

今回の調査では、縄文時代の前期前葉－住居跡1軒、中期中葉－住居跡1軒、中期後葉－住居跡4軒が検出された。

前期前葉の住居跡は、床面は脆弱であり、立ち上がりも不明瞭であった。柱穴もはっきりと確認することはできなかった。建て替えや、2軒が重複している可能性も考えられる。

中期中葉の住居跡は、藤内式期のものであり、覆土中から多くの遺物が検出された。炉は石圓炉であるが一部がぬきとられているようである。この住居跡も、床面・壁とともに不明瞭であった。柱穴は4本から6本であると思われる。

中期後葉の住居跡は4軒検出され、うち1軒が敷石住居であった。敷石住居以外の3軒はいずれも床・壁が不明瞭でしっかりと検出することはできなかった。1軒からは石圓炉が検出された。石圓炉の中からは焼土や炭は検出されなかった。敷石住居跡は長径2mほどと非常に小さく、形状は五角形を呈する。入り口部には小型の深鉢を使った埋甕が埋納されていた。住居の奥壁側（北側）は烟の耕作などによる搅乱によって一部破壊されていたが、床面近くから直径5～10mm程度の砂利が検出された。この砂利は、石圓炉側を短辺とする台形のような形に敷き詰められており、その周辺には直径5～8cmほどの小石がめぐらされていた。このような小石は住居の外周にもめぐらされている。敷石の周囲及び下部には、若干の掘り込みが確認されたが、柱穴は検出されなかった。

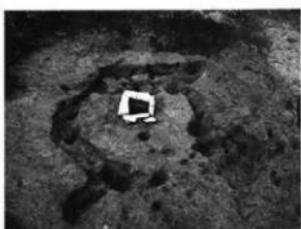
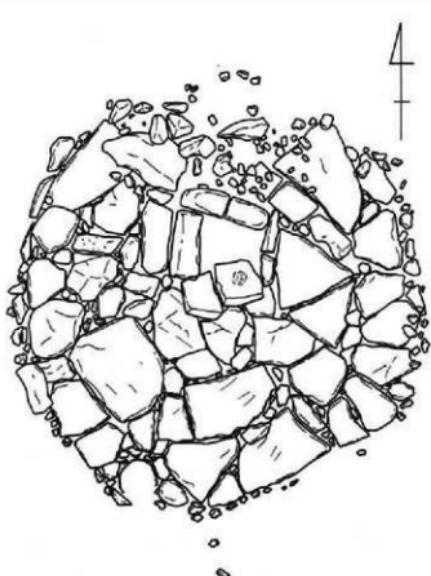
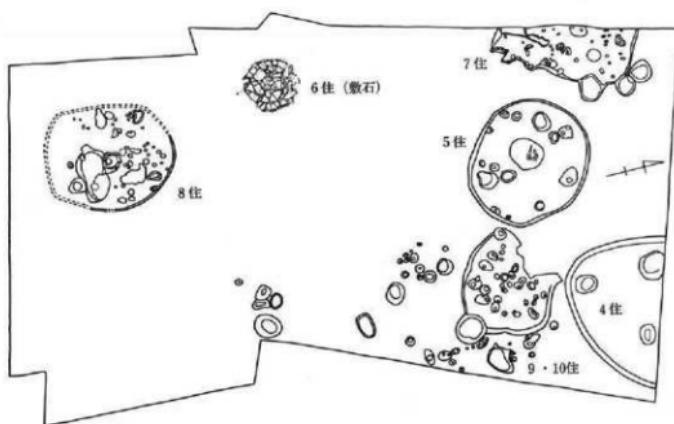
調査地の周辺からは、前期・中期の様々な時期の遺物が表採される。また、黒澤遺跡から斜面を西側に1kmほど上った東原遺跡からは、有舌尖頭器が発見されている。長期にわたって集落が営まれたと思われるこの台地上に、どのように集落が展開していくのか、今後の調査が期待される。



8号住居跡



7号住居跡



敷石住居址 (6号住) S = 1 / 50

## さねはら 17. 真原A遺跡

所在地 武川村大字山高

調査原因 営農活動に先立つ発掘調査

調査期間 1998年10月20日～1998年11月20日

調査面積 450m<sup>2</sup>

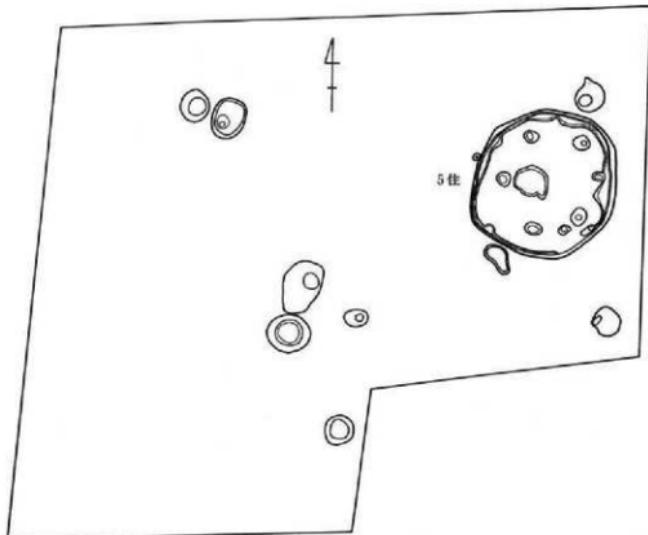
調査主体 武川村教育委員会

担当者 竹田眞人



真原A遺跡は、北西側を石空川、南東側を黒沢川に挟まれた北向きの緩傾斜をなす台地上に立地する。今回発掘調査を行った地点は、武川村大字山高字真原に所在し、標高は約710mほどである。真原A遺跡では、昭和57年・平成8年度に調査が行われており、それぞれ曾利式期の住居跡が1・2件検出されている。平成10年度に行った調査地は、平成9年度に調査された地点の南側の隣接地である。

今年度、調査によって検出された遺構・遺物は曾利式期の住居跡が1軒、土壙2基および、同期の遺物である。5号住居跡（遺構Noは、平成8年度からの通しNoとしている。）は、円形で直径は約5.7mである。支柱穴は、5本もしくは7本で、炉は奥壁側により、石囲炉であったと思われるが、ほとんど抜かれているようである。周溝は壁にそって1周検出されている。また、埋甕が1基入り口部と思われる地点より検出されている。



真原A遺跡発掘区全体図 S = 1 / 200

## 18. 実原A遺跡

所在地 武川村大字黒澤

調査原因 個人住宅建設に先立つ試掘調査

調査期間 1999年1月13日～1999年3月12日

調査面積 60m<sup>2</sup>

調査主体 武川村教育委員会

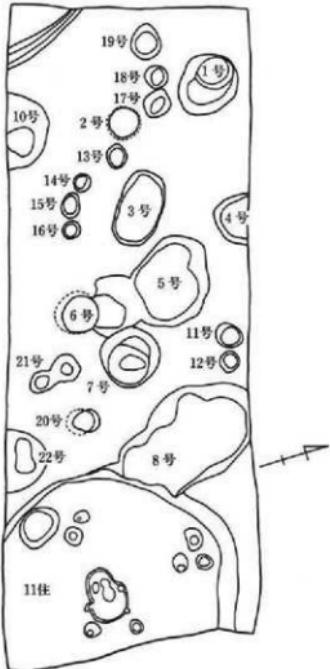
担当者 竹田真人



本遺跡は、武川村黒澤地区に存在する。南の黒沢川と北の大武川に挟まれた台地上にあり、標高は約560mをはかる。黒澤遺跡から500mほど緩斜面を西に上った地点である。黒澤遺跡が、前期前葉・中期中葉及び後葉の集落跡であるのに対し、実原A遺跡は、前期末・中期初頭から前葉の集落跡であることがこれまでの調査で予想されている。

今回の調査は個人住宅の建設に先立ち行われた試掘調査であるが、範囲確認調査をかねて行うこととした。実原A遺跡では平成2年に、神代公園を建設する際に発掘調査が行われており、この調査で縄文時代中期初頭から前葉までの住居跡が10軒発見されている。

今年度の調査は、60m<sup>2</sup>と少ない面積の調査であったが、土壤群の一部と、住居跡の一部が検出された。これらの遺構は、いずれも中期初頭に属するもので、実原A遺跡の広がりを考えるうえで、貴重な手がかりとなった。



実原A遺跡発掘区全体図 S=1/50

平成10年度発掘調査一覧

垂崎市	遺跡名	所在地	面積(m <sup>2</sup> )	調査目的	調査期間	備考	種別
"	石之坪	円野町上円井	4,000	周囲整備	98.4~99.3	発掘	集落跡
"	上横屋	藤井町北下条506外	900	店舗出店	98.9~99.3	"	"
"	新府城跡	中出町中条字城山	375	史跡整備	98.11~99.1	整備試掘	城館跡
"	下木戸第2	中出町中条字下木戸651外	1,500	集合住宅	99.2	試掘	集落跡
"	下木戸第2	中出町中条字下木戸1022外	350	店舗出店	99.2	"	"
"	北下条墓地	藤井町北下条240	112	個人住宅	98.10	発掘	上界
"	羽根前	大草町上条東割788	100	公共施設	98.8	発掘	その他
双葉町	遺跡名	所在地	面積(m <sup>2</sup> )	調査目的	調査期間	備考	種別
"	笠間	亀地3766-1外	2,056	宅地造成	98.6	試掘	散布地
"	藤原B	宇津谷1105-1外	2,380	福祉施設	98.9	"	"
"	麻松	宇津谷5512外	462	宅地造成	99.3	"	"
"	坊沢東C	岩森1126外	4,482	宅地造成	99.3	"	"
明野村	遺跡名	所在地	面積(m <sup>2</sup> )	調査目的	調査期間	備考	種別
"	深山田	小笠原地内	16,000	圃場整備	98.7~12	発掘	集落跡、寺院跡、墓地
"	大日川原	上神取地内	2,250	圃場整備	99.3	"	集落跡、墓地
"	源訪原	上神取1558-1	642	當農活動	98.7~8	"	集落跡
"	桑森	上手4840-2	752	當農活動	98.7~99.1	"	集落跡
"	上神取	上神取地内	576	圃場整備	98.4~5	試掘	集落跡、寺院跡、墓地
"	梅の木	浅尾字梅の木地内	1,760	焼却	99.2	"	集落跡
"	上手	上手533-1	8	個人住宅	98.9	"	"
"	浅尾	浅尾4135	24	個人住宅	98.9	"	"
"	上神取	上神取1119-1	8	個人住宅	99.3	"	"
"	上手	上手9339-1	36	個人住宅	98.9	"	"
須玉町	遺跡名	所在地	面積(m <sup>2</sup> )	調査目的	調査期間	備考	種別
"	多屋前	大豆牛田293-1外	9,400	終末処理場	98.7~99.1	発掘	
"	東向長坂	東向1602外	10,000	圃場整備	98.4~12	"	
"	原の前	上津金3058	900	農村交流施設	99.3	"	
"	着神子南城	着神子3928-5	2,863	公園墓地	99.1	"	
"	宮田	穴半669	300	社員寮	98.8	試掘	
"	御所村北	若神子2269-1	2,400	ショッピングセンター	98.9	"	
"	"	若神子2255-1	830	"	98.11	"	
"	下相の原	下津金2315	40	携帯電話基地局	98.12	"	
"	飛津	東向2011	2,500	圃場整備	99.1	"	
高柳町	遺跡名	所在地	面積(m <sup>2</sup> )	調査目的	調査期間	備考	種別
"	丘の公園入り口	清里字金堀原3545-696	300	道路拡張	98.8	発掘	散布地
"	古造祖神	黄輪字古造祖2270	200	福祉施設	98.8~10	試掘	"
"	上新井	村山北割字上新井1655	200	町営住宅建設	98.11	"	
"	中原	長沢字中原2420	100	農道建設	99.2	"	
"	東久保	藤原字東久保830	200	"	99.2~3		集落跡
"	机山	長沢字机山741	200	農道開闢	99.3	"	
長坂町	遺跡名	所在地	面積(m <sup>2</sup> )	調査目的	調査期間	備考	種別
"	龍角西	長坂下条字龍角1482	1,800	広域農道	98.5~99.3	発掘	集落跡
"	繪屋	長坂下条字繪屋1466外	300	"	98.12~99.3	"	"
"	耳塚周辺遺跡	小荒間字繪屋1813-1	8	宅地造成	98.4	試掘	散布地
"	柳坪南	大八田字柳原361-1外	40	店舗建設	98.5	"	"

長坂町	遺跡名	所在地	面積(㎡)	調査目的	調査期間	備考	種別
上町	大八出字池の4294 1外	50	宅地造成	98.6	〃	〃	
長坂上条	長坂上条字竜僧476-3	50	〃	98.7	〃	聚落跡	
手白塙	大井ヶ森1176-208外	10	宅地造成	98.8	〃	散布地	
米山	大八出字米山6811-72外	40	共同住宅	98.8	〃	〃	
塚田	人八田字淡田1140	16	宅地造成	98.12	〃	〃	
小屋敷	大八出字道添3879-1外	15	宅地造成	99.3	〃	〃	
牛平	白井沢字牛平3178-2	8	個人住宅	99.3	〃	〃	
農業高校前	螺川時原久遠172-7外	20	宅地造成	98.11	〃	〃	
鳥久保遺跡群	中丸字越中久保4198外	3,300	廣場整備	98.11-12	〃	〃	
成岡新田	大八出字町添6696 1外	40	宅地造成	98.8	〃	〃	
深草城跡	大八田南新店2416外	7,000	公園造成	98.12	範囲確認	城館跡	
細屋	長坂下条字社原1466外	1,500	広域農道	98.12	範囲確認	集落跡	
大泉村	遺跡名	所在地	面積(㎡)	調査目的	調査期間	備考	種別
大開上	西井山8240-1725	123	個人住宅	98.4	試掘	散布地	
城下	谷戸2697	12	〃	98.8	〃	〃	
石堂第4	西井出8240-1947外	23	宅地造成	98.10	〃	〃	
石堂第5	西井山8240-21外	15	〃	98.10	〃	〃	
寺所	西井出字堂巣内	35	終末處理場	99.2	発掘	平安聚落跡	
谷戸城跡	谷戸2439-2	100	学术調査	99.3	〃	中世城館	
谷戸城跡	谷戸2439-1,2,3	32	〃	99.3	〃	〃	
史跡谷戸城跡	谷戸字城山	780	史跡整備	98.7~12	〃	〃	
白糸町	遺跡名	所在地	面積(㎡)	調査目的	調査期間	備考	種別
大原I	白須字人原8617-2	9	個人住宅	98.4	試掘	集落跡	
中村	白須1332外	128	道の駅	99.3	〃	散布地	
北原	白須5705外	60	墓地	99.3	〃	聚落跡	
上小用	鳥原520外	1,011	畠縄	98.9~99.3	発掘	〃	
古都所	横手2104-1	14	眾道	98.6	試掘	〃	
武川村	遺跡名	所在地	面積(㎡)	調査目的	調査期間	備考	種別
黒沢第2次	黒沢字下原1723 1外	514	宅地造成	98.4~9	発掘	散布地	
秋坂日影	山高高原地内	1,500	広域農道	98.9	試掘	〃	
真原A第3次	山高真原3567-3	600	賞農活動	98.10~11	発掘	集落跡	
北小路	黒沢1695-1	816	宮農活動	98.11~12	発掘	散布地	
史原A第2次	黒沢小路1579-1	894	宅地造成	99.1~3	発掘	集落跡	

### **III 新規指定文化財**



須玉町新規指定文化財

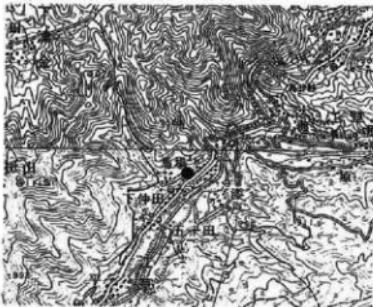
ばんぱくちどめばんしょ

## 1. 馬場の口留番所

所在 地 山梨県北巨摩郡須玉町江草9533番地

所 有 者 馬場区

指定年月日 平成10年9月10日



### 概要

口留番所とは、江戸時代に置かれた関所の事である。武田時代からの制度と伝えられ、県下に24ヶ所あった。その内、須玉町内には、甲府より茅ヶ岳西麓を通り長野県南佐久郡川上村の県境、信州に向かう小尾街道（越坂路）とその支線沿いに4箇所あり明治時代初期に廃止となった。

旧江草村に「江草の三間」と呼ばれる「馬場」、「根古屋」、「岩下」。旧小尾（増富）村の「黒森」にあった。

馬場の口留番所は、根古屋から北東約1.7kmにあり小尾街道より津金に向かう支線で佐久甲州街道に通じる道沿いの馬場集落の北、津金により立地していた。

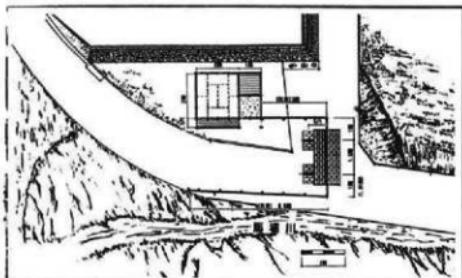
現在建物は、当時の場所より南東約50メートルの場所に移築されている。また、門は明野村の勝永寺の山

門として移築転用され村指定文化財となっている。

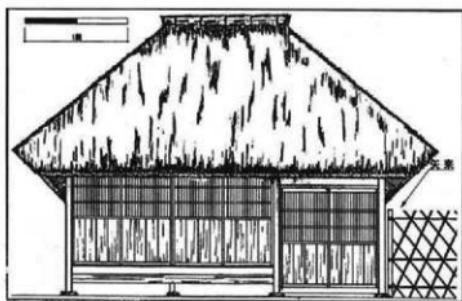
現在の建物は、桁ゆき三間（5.4m）、  
梁ゆき二間（3.6m）の広さ十二疊敷の  
の部屋と幅二尺五寸（0.75m）長さ三間  
(5.4m) の縁側となっている。

部材等の実測調査によって、番所は、  
番所復原図のように正面右手の一間（1.8  
m）に出入り口があり、そこから一間四  
方の土間、板の間とつらなっていたと推  
測される。

又、記録によれば建物以外は、木戸口  
三間半とあり、一間半の門に両袖が一間  
あったと考えられ、矢来といって、竹や  
杭で作った柵が西に三間、東に六間半あ  
ったとされ、現況でその配置を考えると、  
番所配置推定図となる。昔の道は、川沿  
いの低い位置にあり、番所のあいだに石  
段等があったのではないかと考えられる。  
また、番所敷地は町道の拡張により狭く  
なっている。



馬場の口留番所建物配置推定図



馬場の口留番所復元図

## 2. 深草館跡

所 在 地 山梨県北巨摩郡長坂町大八田2416ほか  
所 有 者 坂本千明・小沢照人・森沢恵美子・森沢正江  
指定年月日 1999年2月4日

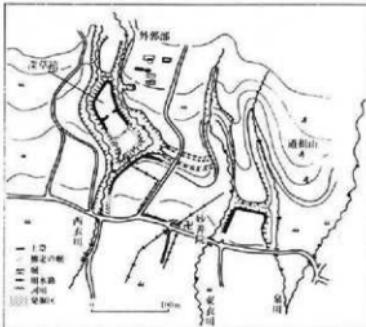


深草館は1970年10月1日付けて長坂町指定文化財に登録されていたが、中世居館の姿を良好にとどめ、八ヶ岳南麓の中世史研究上にも重要な遺構として、県指定の史跡となった。深草館は、逸見清光の嫡男光長の居館と伝えられ、『甲斐国誌』では堀内下總守とその主兵税助の館と記している。『駿中家歴鏡』では堀内氏は光長の末裔とされる。館は八ヶ岳の山体崩壊時につくられた流れ山の台地西側縁辺に位置する。北、東、南の三方を掘り切り、西は西衣川を天然の堀としている。また、それぞれの堀の内側には土塁が巡る。現在は南北二郭だが、かつては南郭をさらに南北に分ける土塁があったという。1980年には、県営圃場整備事業にともない館の北東側台地を山梨県教育委員会が発掘調査した結果、15世紀から17世紀にかけての掘立柱建物群と地下式土坑群などが検出され、深草館の外郭部として位置付けられている(金生遺跡B地区)。深草館の内部は、いたる所に地下式土坑の出入り口と思われる径50cmほどの竪穴が確認でき、今年度実施した地中レーダー探査でも地下式土坑状の存在を示すデータが得られている。深草館の南北それぞれ1kmあまりには国史跡の谷戸城や小和田遺跡群といった中世遺跡が数多く点在する。

### 参考文献

山梨県教育委員会 1988 「金生遺跡I (中世編)」

八巻与志夫 1991 「深草館」[定本・山梨県の城]郷土出版社



深草館周辺図(萩原三雄編 1991「定本・山梨県の城」より)



全景(中央の森)



西側から土塁を望む

平成10年度刊行報告書一覧

発行日	タイトル	発行機関	内 容	備 考	資料交換
1999.3	上横尾遺跡	豊崎市教委	古住14、赤住6、平住3、瓦窯、鍛鍊	内三の丸式窯	○
1999.3	史跡新府城跡	豊崎市教委	古窯、かわらけ、剣	内三の丸式窯	○
1999.3	羽根原遺跡	豊崎市教委	調土器石器、土器等、須恵器	—	○
1998.6	坂井遺跡	豊崎市教委	縄文1、绳土坑多段、方形埴溝基、撫前削上器	—	○
1998.6	前見城	豊崎市教委	宿源	前見城測量図	○
1999.3	白山城の総合研究	豊崎市教委	白山城総合学指調査報告書	白山城測量図	○
1999.3	右原山北遺跡	長坂町教委	調文包含層、平住1、中世並穴3、掘立など	中世並穴遺跡	○
1999.3	宮久保遺跡	長坂町教委	縄文(中末～後期) 住2、純(後) 住2、列石1、平住4、掘立1、中世並穴1、乗石3など	縄文後期散石住居、直状の列石	○
1999.3	丘の公園人口道跡発掘調査報告書	高松町教委	十堆1番	—	○
1999.3	史跡谷ノ城跡1(無冠)	大泉村教委	掘立1、空塼、地表面、かわらけ、内耳、縁石小道、銅製仮鉢	—	○
1999.3	古御所東遺跡	白洲町教委	平住44、掘立1、上坡28、調住1、地塙2、穴4	—	○

山梨県埋蔵文化財センター刊行北巨摩郡内報告書一覧

No.	報告書名
第1集	山梨県北埼市 久保屋敷遺跡発掘調査報告書
第8集	北巨摩郡高坂町 丘の公園14番ホール道跡 菩岡城跡調査書
第13集	御坪遺跡
第14集	八ヶ岳東南麓分布調査報告書
第18集	前井遺跡発掘調査報告書
第26集	丘の公園地内遺跡調査報告書(第1次) 報告書(丘の公園第1・2・3・4遺跡)
第27集	寺子遺跡
第28集	八ヶ岳東南麓地帯分布調査報告書
第31集	野原地帯
第32集	清里の森第1遺跡
第37集	西川遺跡
第39集	金生遺跡I(小世編)
第41集	金生遺跡II(清文時代編)
第46集	丘の公園内遺跡調査報告書(第2次) 報告書(丘の公園第5遺跡)
第47集	八ヶ岳東南麓地帯分布調査報告書
第48集	妻の神遺跡
第52集	小込遺跡
第53集	人輪字水濱跡
第56集	丘の公園第5遺跡 発掘開発報告書
第57集	湯沢遺跡 発掘調査報告書
第58集	城下遺跡 黒田遺跡
第63集	小坂遺跡
第66集	青人北遺跡 穂の木遺跡
第68集	西の入遺跡 富八田遺跡
第70集	草川遺跡
第71集	甲ツ原遺跡報告書(第1次～第3次)
第75集	川又坂上遺跡
第81集	宿尻遺跡
第83集	川ツ原遺跡発掘(第4次調査)
第85集	八ヶ岳東南麓地帯分布調査報告書
第92集	丘の公園第1遺跡
第96集	甲ツ原遺跡(第5次)
第97集	天神遺跡
第100集	口影田遺跡
第111集	竹松遺跡
第114集	甲ツ原遺跡II(第3・4次)
第124集	清里バイパス遺跡 第1・2遺跡
第135集	調古場遺跡(第1・2次調査)
第136集	調古場遺跡(第3次調査)
第144集	甲ツ原遺跡III(第2次・第3次調査)
第145集	甲ツ原遺跡IV(第1・2・3・6・7次調査)
第153集	東坂遺跡
第164集	美輪バイパス(日本)
第165集	美輪バイパス(田上)



表紙は、この地蔵岳の写真を画像処理して作成しました

北巨摩市町村文化財担当者会

八ヶ岳考古（平成10年度年報）

平成11年3月25日 印刷

平成11年3月31日 発行

発行 北巨摩市町村文化財担当者会  
事務局 山梨県北巨摩郡武川村三吹2161-1  
武川村教育委員会

印刷 ほおづき書籍株式会社  
長野県長野市柳原2133-5  
TEL (026) 244-0235

## 引用参考文献

- Testart A. 95 「新不平等起源論」 山内利明 法政大学出版
- Susan Kent 89 『Farmers as hunters』 Cambridge University Press
- 雨宮端生 93 「温帯森林の初期定住 繩文時代初頭の南九州を取り上げて」 古文化論叢 30
- 安斎正人 94 「縄文文化の発現」 先史考古学論集 3
- 岡村道雄 87 「總括」 里浜貝塚 I・II
- 衆島義明 90 「テボの意義」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団研究紀要 7
- 小林達雄 73 「多摩ニュータウンの先住者」 月刊文化財 112
- 小林達雄 80 「縄文時代の集落」 国史学10・11合併号
- 小林達雄 83 「総論」 縄文文化の研究3 縄文土器
- 小林達雄 86 「2 原始集落」 岩波講座日本考古学 4 集落と祭祀
- 坂本 彰 96 「花見山式土器とその周辺」 神奈川の縄文文化の起源を探る
- 坂本 彰 96 「槍と土器」 考古論叢 神奈川 5
- 桜井洋也 93 「細石刃文化遺跡と河川」 シンポジウム細石刃文化研究の新たな展開
- 桜井准也 93 「縄文時代における遺物の空間分析と考古学的地域について」 民族考古 1
- 桜井准也 94 「1号課集中部内の造構構について」 南鎌治山遺跡発掘調査報告書 1
- 桜井准也ほか 92 「湘南藤沢キャンパス内遺跡 第2巻岩宿時代・縄文時代」 慶應義塾
- 佐藤達夫 74 「黎明期の日本」 国説 日本の歴史
- 佐藤浩之 92 「北方系削片系細石器石器群と定住化仮説」 法政大学大学院紀要 29
- 清水芳裕 73 「縄文時代の集団領域について」 考古学研究 19-4
- 白石浩之 94 「縄文時代草創期の集団構造への接近」 縄文時代 5
- 源訪問順 88 「相模野台地における石器群の変遷」 神奈川考古 24
- 田中美司 92 「縄文草創期の墓一器物の配置と撒布」 考古学研究 39-1
- 伊田哲也 83 「縄文時代草創期後半の堅穴住居について」 大和市史研究 9
- 西田正規 80 「縄文時代の食料資源と生業活動」 季刊人類学 11-3
- 西田正規 86 「定住革命」 新曜社
- 西本報弘 85 「狩獵・漁労の場と遺跡」 季刊考古学 7
- 羽生淳子 93 「集落の大きさと居住形態」 季刊考古学 44
- 原田昌幸 83 「燃糸文期の堅穴住居跡」 土曜考古 7
- 原田昌幸 84 「絞燃糸文期の堅穴住居跡」 土曜考古 8
- 水野正好 69 「縄文時代集落研究への基礎的操作」 古代文化 21-3・4
- 町田勝ほか 77 「前田耕地 I II III IV」
- 村田文夫・増子章： 78 「川崎市多摩区黒川海道遺跡採集の石器群」 神奈川考古 3
- 望月 芳 96 「藤沢市における縄文時代草創期の遺跡の立地について」 神奈川の縄文文化の起源を探る 2
- 山内清男 69 「縄文草創期の諸問題」 MUSEUM 224
- 山内清男・佐藤達夫 62 「縄文土器の古さ」 科学読光 14-13
- 渡辺 勝 66 「縄文時代人の生態」 人類学雑誌 74-2

